毎月十日廿五日發行

家庭雜誌

壹冊 定價金五錢

明治二十九年九月廿五日發兌



第八拾六號

口繪＝有王
社說＝僞善矯飾
科學＝地球は家族の一つ
談叢＝復讐（乾坤）

俳女すて　中野其之助
たかいなゝき　春波生
やんちや姫　一葉庵主人
青小僧　薫香女史
ナンセン博士　天水生
さんげ猿（上）　園部紫嬌

家政＝手紙の事、雜事片々、病兒のため、夫に對する妻、十月中の園藝
社交＝流行の髮風
雜錄＝小兒の世界

徳富猪一郎著

國民叢書

進歩乎退歩乎	定價十錢	郵税二錢
人物管見	定價十五錢	郵税二錢
青年と教育	定價十五錢	郵税四錢
靜思餘錄	定價十五錢	郵税四錢
文學斷片	定價十五錢	郵税四錢
天然と人	定價二十錢	郵税四錢
第二靜思餘錄	定價十錢	郵税二錢
風雲漫錄	定價十五錢	郵税四錢
家庭小訓	定價十二錢	郵税二錢
經世小策 上巻	定價廿錢	郵税四錢
經世小策 下巻	定價廿錢	郵税四錢

發兌元 東京市京橋區日吉町四番地 民友社

渡邊修二郎著

内政外教衝突史

定價廿五錢 郵税四錢

全編三十章 畫圖七種入

外教の我國に侵來せしは、歴史上の一大事件にして、其國家に影響し、人心を感動せしこと甚だ大なり。爲に時の政府は鎖國排外の政策を執り。我國民は騒亂流血の慘變を見たり。故に外交の歴史を究めんと欲せば、主として外教傳來の事跡を考へざるべからず。然るに當時の事を記するもの大抵埋沒又堙滅し、今日之を得ること難し、偶ま外人の手に成るの書ありと雖も、亦誤謬と不備を免れず（鎖國以後の事蹟は全く欠く）著者之を慨し、幾多の散佚せる記錄を採集し、或は舊家の秘書を探り、或は世に稀なる歐書を索め、多年の勞を積みて竟に此書を完成するを得たり。其考證最も精確、從來世に知られざりし許多の事實を闡明し、讀者をして興味を覺えしむ、是れ此書の一大特色にして、大に政治と宗教との關係、並に日本人の特性を觀察するに於て欠ぐべからざるの要書なり。

發行所 東京日吉町 民友社

明治卅九年九月廿五日發行
家庭雜誌第八拾六號

目録

口繪

有王（久保田米齋）

社説

僞善嬌飾を去れ……樂天生……一
水戸黄門光圀教訓

史談

俳女すて……中野其之助……三

科學

地球は家族の一つ……松ヶ枝……七

文藝

老人七首
たかいなゝき……春波生……一三
やんちや姫……一栄庵主人……二〇
青小僧……蕙香女史……二四
觀石會

談叢

復讐……乾坤……二九
ナンセン博士……天水生……三一
さんげ猿（上）……園部紫嬌……三八
水害と寄物

家政

手紙の事……四三
雑布片々……四四
生れし嬰兒のため……四四
夫に對する妻……四六
十月中の園藝……四八

社交

流行の髪風……流行子……四八

雜録

小兒の世界……天水生……四九
羊に草はむ術……四九
鳥の如く囀づる人間……四九
小島の住家……菜女……五〇
旅行猫……五〇
將來の眞民……五一
有王……五一



家庭雜誌第八拾六號（明治廿九年九月二十五日發兌）

社說

僞善矯飾を去れ

樂天生

『侍の子と云ふものは腹が減つてもひもじうない』との一語、實に是れ悲壯高壯、朝日に匂ふ山櫻の如き日本武士の精神を、三尺兒童の口より迸發せしめたるもの、吾人は其高絕美絕なるを感歎す。

然れども人は詩的にのみ生活する能はず、國は美術的にのみ獨立すると能はず。若し己れは秋毫も社會より取る所なくして、而して社會に向つては、財產をも、快樂をも、生命をも、其他總てのものをも犧牲とせざる可らずとせば、人は一日も生存すると能はざるべし。國は一日も獨立すると能はざるべし。

人生意氣に感ず、感ずれば獻身的となる。財產何かあらん、生命何かあらん。馬前に討死もすべし、殉死もすべし、鼎鑊刀鋸飴よりも甘かるべし。然れども人は意氣のみに滿たされず。肩を拍ち背を撫でもて僞略を運らしつゝある世の中に於て、煽揚揶揄の中に正直者を利用せんとしつゝある外交家の間に在りて、意氣に感ぜんとするも感ずると能はざる場合あるべし。

『皮毛擺落見天眞』、人は僞善を去らざれば、矯飾を去らざれば、總ての皮毛を去らざれば、即ち赤裸々とならざれば、決して人と融合する能はざると言ふ迄もなし。

食ひたきものを食はず、衣たきものを衣ずして、朋友に寄與し、親族に寄與し、社會に寄與す。二三回は快感あるべし、四五回は快感あるべし。然れども幾十回も幾百回も何時までも、自己の汗と膏と血を以て、朋友や親族や社會の一叩頭一歡笑を博し以て無上の快樂

と爲すとは、聖人と雖も耐ゆると能はざる所ならむ。

人は常に虚飾の爲めに苦しめらるゝものなり、僞善の爲めに苦しめらるゝものなり。衣食住を分外に飾らんとするは物質的僞善にあらずや、慈善救恤義理などを分外に張大にするは精神的虚飾にあらずや。僞善虚飾は如何なる塲合に於ても苦痛を免れざるなり。

朋來りて幾金を貸與せよと言ふ。一面は朋友の感情を傷はざらん爲め、他の一面は自家の躰面を維持せん爲め、其請ふがまゝに貸與(實は投與なるもの多かるべし)す。以爲らく斯くせざれば男が立たぬと。而も其朋ありて懊惱するものあるべし。曰く何學校、曰く何寺院、曰く震災、曰く水災、曰く火災、事ある毎に義捐寄附する者あり。其眞に同情の油然たるに於て、自己の分に應じて之を爲すと最も好しと雖も、無理算段して、家族に欠乏を感ぜしめて、一家に不和を起さしめて、懊惱煩悶して、分外の義捐を爲すには及ばざるなり。

總て自ら標置すると餘りに高く、斯る食を食ひ、斯る衣を着、斯る家に住まざれば、交際社會に幅がきかぬと云ふ如き。斯く朋友親族に寄與し、斯く社會に義捐せざれば、乃公の男が立たぬと云ふ如き。精神的虚飾を以て、物質的僞善を以て、分外の事を爲すは大に宜しからず。僞善虚飾の永續する理由はなし、永續せざるは尚ほ可なれども、朋友親族と共倒れとなり、社會と共潰れとなれば、終に分内の義捐寄附をも爲すこと能はざるに非ずや。細く長く渡れとは、處世の秘訣なるのみならず、實に人生の眞諦なり。

汝の矯飾を去れ、汝の僞善を去れ、總ての外皮を去れ、而して赤裸々となれ、血なき、涙なき、生命なき、器械的慈善、形式的義理、虚榮的人情は、社會の爲めにも、朋友の爲めにも、親族の爲めにも、抑汝自身の爲めにも、秋毫の功果を與へざるなり。

水戸黄門光國教訓

苦は樂の種たのしみはくるしみのたねとしるべし、主人と親は無理なるものと思へ、下人は足らぬものと知るべし、恩を忘るゝことなかれ、子程に親を思へ、子なきものは身にくらべ近き手本とすべし、掟におぢよ、火におぢよ、分別なきものにおぢよ、酒と色とは敵と知るべし、朝寝すべからず、分別は堪忍なり、小なる事は分別せよ、大なる事は驚くべからず、九分に足らば十分にこぼるゝと知るべし、

正直は一生の寶、堪忍は一生の相續、慈悲は一生の祈禱。

史談

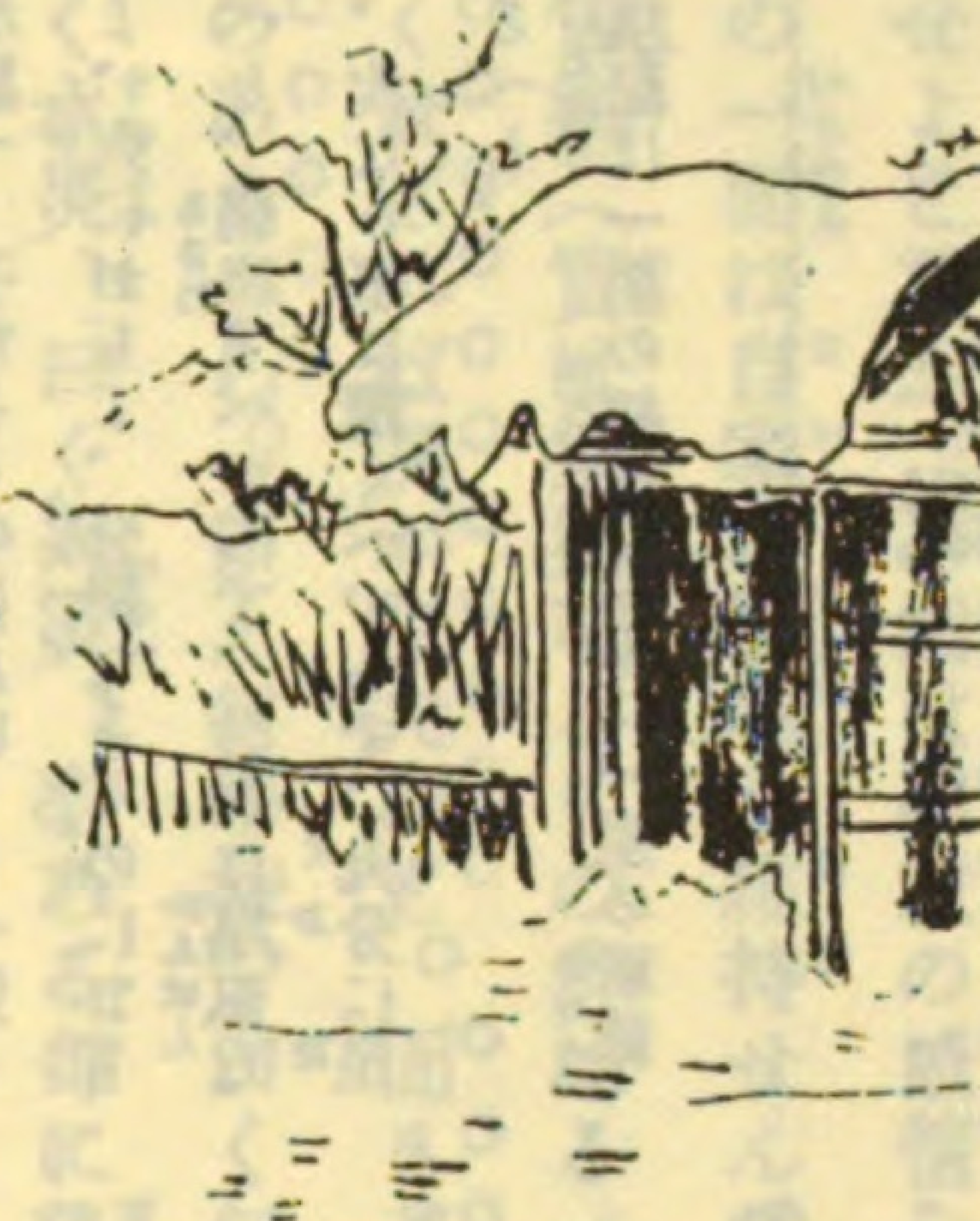
俳女すて

中野其之助

世にも名高き芭蕉翁の名吟『古池やかはず飛込む水の音』を知らざるものゝありとても、『雪の朝二の字二の字の下駄のあと』なる發句を知らざるものはあらざるべし、話家の前座も喋々として是を解き、小學校の一年生も亦是を知る、誠に〳〵罪もなき無造作至極平々凡々、何の譯もなき十七文字、唯あからさまなる其内に何となく一種の妙あり、佳句として稱すべきにあらざるも、亦惡句として退くべきにあらず、『古池や』と共に可もなく不可もなく所謂善惡邪正の境を離れ批評以外に立てるものなり、年所茲に久しきを經て依然人口に膾炙して忘られざるや亦宜なり、扨此句の作者は誰ぞ。

或は加賀の千代なりといひ、又は芭蕉なりとも傳ふ、（是史に傳ふるにあらず、口から口へ相傳ふ、つまり風潮すといふ意味なり、讀む人決して咎むなかれ）決して〳〵左にあらず、加賀の千代の作にもあらず、芭蕉翁の句にもあらず、（古來發句といへば一も二もなく芭蕉の句なりといひ、然らざれば加賀の千代の作ぞと傳ふ、坊間市井の誤り擧げて數ふべからず、甚しきは

芭蕉以前の發句さへも然ぞと誤り傳ふるなど、隨分おかしな話なり、このおかしな所こそ芭蕉と千代とのゑらき所、萬人崇拜の極と知るべし、俚諺に大師は弘法に取られ、太閤は秀吉にとられ、さばきは大岡にとられたりといふ事あり、即ち發句は芭蕉と千代とに取られしなり、諸子も各々勉強して其道々の大豪傑、偉人物ともなりて、發句に於ける芭蕉の如く千代女の如く、大師に於ける弘法の如く、太閤に於ける秀吉の如く、裁判に於ける大岡の如く必ず〳〵なりたまへ、ゆめ〳〵忘れ怠り給ふな、史傳を讀むはかゝる希望を曳起さんが爲なるべし、註を入れて長々しく老の繰言くりかへす、愚直を笑ひたまふなよ》



此二の字二の字の發句こそ、元祿の俳壇に美しき花を咲かせ、遠く王朝《平安朝ともいひ又は藤原時代ともいふ》の文壇に香はしき名を殘したる紫清の二名媛《紫とは紫式部有名なる源氏物語の著者、越前守爲時の娘なり、先々月の家庭雜誌の口繪にあり、清とは清少納言とて清原氏の女なり、日本隨筆の親玉枕の草子は此人の作なり、兩女とも百人一首にも出居れば、いはずとも諸子其名は疾くより承知なるべし》さては梨壺の五人の向ふを張りし俳諧四閨秀《千代、園、秋色と共に》の一人捨女が六才の時の吟なり。事ふりにたれど、せんだんは二葉の内より香はしく、伽陵頻迦は卵の内にありて、鳴く聲已に衆鳥に勝るとかや、先輩の書殘したるものを種とし更に珍藏の寫本

より相補ふて茲に語る此閨秀が傳記、先きにもめせし俳女秋色の傳を讀みたまひたるの忍耐を以て悪文醜句誠に下手の長談義も、欠伸せずして一讀あれ、余が滿足はいふも更、地下の捨女それいか程か喜ばん。

捨女は丹波柏原といふ處の人にして、豪族田直之進が長女なり、《田氏は今の衆議院議員田艇吉氏及び先きに神奈川縣の警部長たりし田健次郎氏の祖先なり》幼きより風流の才誠に深く、母《種女といふ氏は北村、季吟が一族の人なりといふ説もあれど如何にや、暫く疑ひを存し置く》が敎ふる讀書きの道、なに波津淺香山の筆の運びも却て敎ふる人にも優り、所謂一を聞て十を悟るいちはやき才名夙に四方に聞へ渡り、十三歳の春とかや都五條あたりに住たまふ、いとやんごとなき何某の三位殿の御前に召され、俳諧の所望ありしに、『粟の穂や身は數ならぬ女郎花』《誠に〳〵優しくも吟したるものかな、身は數ならぬ女郎花、僅かに西洋の文字を解し、或は國文の初歩を學び得しとて得々揚々として、たとへば手綱のきれし馬の如く荒れまはりに荒れまわり、耻かしくもなく自から閨秀小説家とやら、田舍おどしの名乘を揚げ、終りには己れ自からその小説の種になる、當今の姉御達、此句を守りにしたまへかし、『身は數ならぬ』といふ事こそ、まことに〳〵千兩千貫、女子に於ても男子にしても立身出精第一の心得なり》と水莖の跡美しく書いて上げたり《此一事都に召されしにあらず、國の大守江戸出府の途次駕を枉げて田氏方へ今年十三の捨女を見んとてよりたまひしとの説もあり、いづれにてもよし眼目は其三位殿と大守侯とにあらずして、謙遜極まる女らしき『身は數ならぬ』といふにあるなり、故に余は兩説いづれでもよしと思ふ、諸子の考それ如何》一見殊の外にめでたまひ、おほけなくも『萱原に惜しや捨おく露の玉』と俳諧の發句を以て御褒めありたり、《此短冊今猶傳へ傳は

りて播州綱干の里、捨女が建てし不徹菴といふにあり、先年或人の紹介によりて一見せり》。其後は季吟に從つて和歌を學び、堪能の咏甚だ多し、俳諧は故ありて季吟によらず、點を宮川松堅に乞ひ、名吟少なからざる內、とりわけて、

お雜煮や千代のかづかく花松魚
拜みたし淚くもらで涅槃像
泣にさへ笑ふはいかにほとゝぎす
來る秋のきりきは見する一葉哉
思ふことなき顏しても秋の暮
吹なれて皆にもならぬ尾花哉

などは流石やさしき婦女の情愛、したゝる許あふるゝばかり有髯六尺の男子到底及ばぬ事どもなり、就中

うきことに馴れて雪間の嫁菜哉

の如き、美辭として傳ふべく、教訓として傳ふべく、僅々十七文字の內無量無限の情愛ひそみ、教訓籠る、何等の妙ぞ、何等の巧ぞ、余は此句を讀む每に我知らず淚潸然として更に禁せず、千代にも園にも秋色にも實にかゝる傑句なし、此一句にて元祿の俳人として天下後世に語るに足る、加之ならず、俳聖芭蕉を怒かし、我及ばずと嘆ぜしめたる

ひぐらしや
捨て置ても
暮る日を

とは實に評釋注解の外に立てり、元祿の歌人《名は今記臆せず、諸子もし知りたはゝ教へたまへ》『かしましや捨ておくとも暮る日をなどさわくらんなれよひくらし』と咏じ殘せしは



暗合か、摸擬か同一なり。
二十歳の秋宗族某といへるは嫁して琴瑟相和し間もなく三人の男子を生めり、迅速のことはりを示す有爲無常の風颯と暖かなる家庭に吹き込み、年まだ若きに夫は最愛の妻を捨てゝ遠く行けり、これ捨女が漸く三十の春をむかへし時なりけり。
それより後暫くは片見に殘る三人の子を養ひ、多くの下男下女を使ひ家を治め來りしが、其子人となりて後は家を譲りて髪を卸ろし、播州網干龍門寺の盤桂禪師が衣下となり、(此盤桂禪師といふは、法德當時に輝き渡り、迁化の後勅命ありて大法正眼國師と諡られたり、『草よ木よ汝に示す今朝の露』とて佛門の道歌ともいふべき俳句今に殘れり)妙融尼と號し龍門寺の傍わらに不徹菴とて方丈の草庵を結び、茲に享年六十五を以て元祿十一年八月十日

秋風の吹來るからに糸柳
心細くもちる夕かな

一首の咏を殘して逝けり。
遺跡今に至るも更に衰へず、播州網干の不徹菴とて、河内の道明寺と並び稱され關西の二大尼寺いよゝます〱盛なり。

科學

地球は家族の一つ

松ヶ枝女史

私が十二三歳の頃でした、秋の夜澄み渡つた空の上に、無數の星が羅列して居るのを見、月が誠に冴えて美はしいのをながめ、切りにその天上の有樣が知り度くなつて、年長の人たちに樣々な事を尋ねたとがありました、その後十四の暮始めて天文學といふものを學びましたが、誠に面白く思はれて、大きく

なつたら英國か米國に洋行して、天文臺とかいふものに登つて、日月星の事悉しく學んで見度い、立派な天文學者になつて歸朝しやう、など、空想を描いた事もありました、さて此頃歐洲の或る天文學者等は、明治三十三年になりますと二つの星が同じ軌道を進んで相觸れる、そうしてよし毀れぬまでにもこの世界中に有毒な氣が充ちて、動物は皆死亡するといふ説を唱ひて居ります、こんな時天文の事研究するのはなんと面白い事じやありますまいか、英國オキスフォルド大學の天文學教授プレチャルド博士が、初學の爲には最もよき書なりとて推賛せられた、ギボルヌ女史の「日月星」といふ書を參考して、今日より逐次天文の事をお話し致しましやう。

先づ我々の住んで居る地球とは何でしやう、なんだか大そう大きなやうで、又小さなもの……地球の上にあるものと比べては誠に大いが、地球以外のものと比べては誠に小さなものでムいます、まあ一寸この世界を去つて、その廣い〳〵宇宙の間に旅行するとしましやうか、世界は實に小さなものといふ事が分ります、去かしこの世界即ち地球とは何でしやう。

思へば昔の人はなか〳〵愛らしい考を持つて居りました、即ち私共は凡ての物の中心に動かずに立て居るもの、地球は際涯なく廣いが、然し平面なもので、太陽はたゞ私共計りの爲めに照り、幾萬の星は夜な〳〵私共の爲めにのみ輝き、青き空は我々を覆ふ天蓋だと考へて居つたので、たゞ下等動物の上に主人な計りではなく、人間は實に宇宙間唯一の王だ、日も、月も、星も、將たこの地球もたゞ、我々人間の爲にのみ造られたものと思ふて居つたのです、勿論昔でも中にはも少しよく理を知つて居つた人もありましたが、是れが一般の考でした、然し今は天地の事少しは明かになりました、廣い意味の世界とは、我々が住むこの地球計り

ではありません、地球とは世界といふ家族のうちの一つなので、この家族は即ち名づけて太陽系と申します、さて我々のこの地球は、この家族の長どころではない、主要な位置の一つでもありません、誠にたゞ小さな妹とでも云はれそうな立ち塲なのです、然し皆樣、失望するには及びません、この地球が斯く小さいほど宇宙の如何に大きなものかといふとが分りましやう、その廣大な宇宙の事を研究する我々は、何と賴もしいではありますまいか。

昔の人は地球を宇宙の中心と考へた計りでなく、地球は何時も變らぬもの、太陽や月や星は動くが、地球は動かない、我々の足の下なる硬き土地は、何時もそこに固く定つてあるもの、日々太陽は登つて又入落ちる、夜な／＼星は等しく顯はれて又隱くるゝ、我々はこの大きな地球の上に固く靜かに立て居つて、太陽や月や星は我々の都合の爲め、又たゞ我々のみの爲めに、二十四時間に一度づゝ我々の圍りを週ぐつて居るものと、信じて居りました。

然し樣々な學者等の熱心な研究の結果で、今は天地の事を餘ほど分るやうになりました、即ち動くのは地球で太陽ではない、動くのは地球で星ではない、太陽や星が毎日毎夜東から起つて空を渡り、西の方に沈んで行くのは、彼等が眞に動くのではない、丁度私共が汽車に乘つて進行する時、周圍の垣根や、家や、田畑や、電柱が、走るやうに見ゆると同じ理でムいます、實際彼等は固定して動かない、然かし何んだか動いて走つて居るやうに見えまする、是れが音もなく、震動もなく、ガタ／＼もない時には一層よく分ります、時によると汽車が他の汽車の並み居る間から、靜かに停車塲を去ることがありますが、こんな時最初は動いて居るのが、自分の乘て居る汽車か、或は隣りのか、判じ難ふムいます、我々の地球の運行は響もなければ、撞突も

ない、至て早く靜かで平等でムいます。

我々の住する地球の事を知らうと思へば、隨て周圍の他のものゝことをも知らねばなりませぬ、宇宙といふ語は誠に廣い意味で、天地間の萬づのものを總合した名稱です、時によりてはもつと我々に近い或る部分のとのみに用ゆるともありますが、こゝでは第一の廣い意味にて用ひます。

最も悧發な天文學者でも、星が何處まであるものか知る人はムいません、我々の上に見ゆる大空は、誠に涯しなく、そのうちにある星の數は、誠に想像も出來ません、或るものは凡ての人の肉眼で見られますが、或る星は望遠鏡でなければ見えません、私共この地球を去つて、廣茫たるこの宇宙に私共の想像を旅行させますと、私共は實に細微な一點のやうなものといふ感が起ります、宇宙の空間には際涯といふものはありません、望遠鏡は愈よ〳〵工夫を積んで、何時も前よりは一層強く明らかに遠くが見ゆるやうに造られますが、猶星はまだ〳〵ムいます、發見せられせられても無數の星はなほその奥に〳〵と並んで居ります。

地球が平坦な原のやうなものといふ考は、已に捨てられて、今は圓い動くものだといふを、誰しも知るやうになりました。

皆様がこの日本で空をおながめになりますと、濠洲や南米に在る人とは、丁度反對の方向を見るのです。

天とか空とか申のは、私共何地の邊に立ち居らうとも、その地から丁度上の方に當る處を申ので、下と云ふのはこの地球の中心を指すのです、

地球上東西南北五大洲何れの處にありましても、皆様の頭上には夜な〳〵無數の星がきらめきましやう、さてこの星とは何物でしやう、此れが問題です、一歩むづかしい研究に蹈み入る前に、この事を少し申ましやう。

或る星はよく人に知られて居ります、縦令ば大洋の航海者や砂漠の旅行者等が、指導者と頼む北斗星、或はその直き近くに見られ得る大熊星、又は猟星といふ大きな輝く星などは人が皆知つて居る所です。

星にはそれ〴〵違つた星宿があります、即ちそれ〴〵主要なる星が、或る一群れに集められて、何々星宿と云ふて各異つた名稱が與えられてあるのです、幾千年前誰がこう集めてその名を付けたか分りませんが、昔から人たちは星宿の事を様々考へたものでした、それらの星は幾千年この方決してその位置を變じないから、恒星と呼ばれてあります、代々誠に星は夜な〳〵顕はれ、大空を渡つては又西方に沈んで行く、然しこれは前申した通り、たゞそう動くやうに見ゆるのです、地球が二十四時間に一度づゝその地軸に於て自轉するとが、太陽や星を毎日毎夜東より出で西に歩んで行くやうに見せしむるのです、さて夜な〳〵見ゆるあの無數の美くしい天河の金粒は、殘らず恒星ではムいません、恒星と申すのと、行星或は遊星と申のとは、大に違ふて居ります、恒星といふのは、即ち變らず動かざる星で、遊星といふのはその恒星の周圍の軌道を廻ぐる星なのです、私共が宵に見るあの愛らしい金星即ち宵の明星は、恒星ではありません。

恒星と云ふのは、一つの太陽なので、私共の大切な太陽も、實は一個の恒星に過ぎないのです、夜々空に見ゆる幾多の恒星は、皆大小の異同こそあれ、個々私共の太陽と同じな太陽なのでムいます。

私共の太陽が何故あんなに大きく輝いて見ゆるか、と申せば、それは私共に余ほど近いからでムいます、星は皆私共から非常に遠い、まあその距離に付ては逐次申上げましやう、もし今數多の星を取つて、私共の太陽が居る處の位置に据えますなら、矢張大きく輝くやうになるので、中には私共の太陽よりも一層大きく輝

きも強いものもありまする、而してもし又私共の太陽を移して、小さな星の近くに遣りますなら、光輝も大さもだん／＼減じて、矢張り普通の星のやうになり、どれが私共の太陽であつたか分らないやうになります る。

恒星は、何千年も相變らず同じ場所に同じ形ちを保つて居るといふことを申しましたが、さてこゝに遊星即ち行星とも惑星とも申す、幾多の星があるといふ事も、前一寸申置きましたが、この遊星と申のは眞實の星ではない、そうして又恒星のやうに私共から餘り遠くもありません、彼等は皆我々の家族即ち太陽系中のものどもなので、我々が住んで居ると同じやうな世界でムいます、矢張り太陽の周圍を廻つて光りと熱とを仰ぐのです。

それ故丁度私共の太陽が恒星である如く、恒星は太陽で我々の地球即ち世界が、惑星であるやうに惑星たちは、又各々一個の世界なのでムいます、地球とは我々が住んで居る特別なる惑星即ち世界に與へた名稱でムいます。

惑星はきら／＼しないので、恒星との區別が付けられましやうが、これら二種の星の大差異と云ふものは、恒星は自分の赫々たる燃ゆるやうな光で耀くが、惑星には自分の光といふものは持たぬ、恒星から光輝の反射せられて始めて耀くといふ事實であります。

老人七首（狂歌）

皺がよるほくろが出來る背がかゞむ
　あたまがはげる毛が白くなる
　　「是れ人の見ぐるしきを知るべし

手はふるふ足はよろつく齒はぬける
　耳はきこえず目はうさくなる
　　「是れ人の數ならぬを知るべし

またしてもおなじはなしに孫自慢
　達者自慢にふるき洒落いふ
　　「是れ人の片腹いたきを知るべし

くどうなる氣短になる愚痴になる
　思ひつくことみなふるくなる
　　「是れ人のあざけるを知るべし
身にそふは頭巾えりまきつゑ目鏡
　湯婆溫石にしゆびんまごの手
　　「是れ人のかゝる身の上を知らずして
聞たがる死にともながるさびしがる
　出しやばりたがる世話燒たがる
　　「是れをつれに姿見さして、老ひたる程なかへりみたしなみてよろし、されば何をゆるすといへば
宵寢朝寢ひる寢ものぐさ物わすれ
　それこそよけれ世に立ぬ身は　（橫井也有）

文　藝

たかいなゝき

春　波　生

出仕の勤なに事もなく茲にすんで、小さくも亦むさくろしくも手足のばして心のまゝ、これぞ我ための本城と頼める住居にさがり行く心の中、それは〳〵筆にも詞にも中々もつて盡さるゝわけではない、いそ〳〵として一歩は一歩よりもあゆみはやく、今しも役所をはなれて頓て七八町ともいふべき明神の森まで來た。

森のかたへに年ひさしきよしづ張の茶店、往來の人の足をやすめる處がある、店の軒なる形おかしき自然木の柱に繫ぎとめたる一匹の駿足、たけ毛色たてがみより蹄のすへに至るまで露一點のいひぶんなき誠に〳〵希代の逸物、ふき來る涼風を身にうけて、高く一聲いなゝいた。

嘶ないた其聲に足ふみとゞめ、やゝ暫は何にも言はず、唯しげ〳〵として見詰て居たが、やがてつか〳〵とあたり近くへ進より、柄の上に組たりし左右の手を解いて首のあたりより尻こぶたのあたりまで、それは〳〵何返となくなでさすり〳〵、いかにも〳〵過がてに見えたりしが、遂には此方をむいて、

『馬方これは何處へひいて行のじや』
問聲に今まで眞中の床机に腰かけ、仲間と見えて四十二三の鬚多き男と何やら頻と打私語で居たりし馬方
『此處までひいて來のでがす、別に外へは行ませんので』
『さうか、こゝまで來たのか、して此處は何人の邸へじや』
『どなたの邸といふあてもないのでがす、どなたにでもよい買とりて頂かふと存じまして』
答終りては又もや前の私語を打つゞける。
『だうもよい馬じや、實に希代の逸物じやの』
『左樣でがす、中々の代物でがす』
猶もえげ／＼とうちながめ、打ながめては撫さすり、撫さすりては打ながめ、
『して價は何程といふのじや』
問へども馬方は直にそを答へんともせず、答へないのも更に更に無理はない、衣服大小をはじめ、すべての身のまわり左程立派にもなき人の問ふたところが元より買取る力はない、されば答ふるも亦無駄であると思ふ心の色自づから詞にあらはれ、
『誠に／＼たかいてがす、中々やすくないのでがす』艶もなく色もなく、御身達の瘦腕では、とても／＼といはぬばかり。
無禮は下賤なるものゝならひ、それを咎めだてせんも益なしと心を定め、殘おしげに、見かへり／＼歩みをはこんでかへり行く。
屋敷町のかたほとりに、いとも／＼さゝやかなる取葺屋根、いはゞあばら屋ともいふべきにも、玄關式臺の一々、黑板塀かぶき門のこしらへ、小さしといへども植込の松、沓ぬぎの石に至るまで、流石町人百性の家とは自づから其趣を異にせるこそ現に賴もしき心地である、此處こそ織田家の御徒士山内一豊が住居であ

る、門をあけて入り來る夫の足音に、さてこそは今御歸といそ〳〵としていとも優しき笑をつくり、人やかに出むかふたるは、此年やう〳〵十八といふ若きにも似ず才名同輩の間に高き、路子とてそが最愛の妻である。

座敷に通りて大小は床の間の刀掛にかけ、妻の出す着がへにあらためてやおら其處に座したるまゝ、指うつむいて何にもいはず、何時にもなき心の更に浮ばぬそぶりは、誠に〳〵氣がゝりの次第、さていかにしたまいつるにやと、共に〳〵自からも浮ばぬ顔、をづ〳〵として側近くへすりより、うや〳〵しげに兩手をついて、

『何時にもなき、御面持の更にすぐれたまはぬは、扨如何に仕たまひしにや』

問どかくぞとも答へばこそ、によ〳〵ます〳〵指うつむいて唯おり〳〵につく溜息、妻の身として何とて心のやすかるべき、

『さては心地だもあしくましますにや』

『イヤどこも更に心地わるきことはない』

『上樣の御身にもし』

『上樣にも相かはりましまさず』

身に何の恙もなく、扨は又身にかへて大事と思ふ主人の上に、何の事もなきに、何とてかくは心更に進まぬ氣色、思ひもいとゞ塞がる心地に、もしもや朋輩とのいさかひや仕たまひけんか、ゆめ〳〵さることとは日頃の行ひに照し見て更に〳〵あらざるべし、されば推ても知るき萬足らはぬ勝の我が身、もしもや心に染ぬふしあるかやと、とつおいつ千々に心を碎き〳〵て樣々に思ひやるうさつらさ、げに女程何事につけてもつらきものはなし、されば猶々いふてよきや、問ふてあしきや、心も心ならざれども、

『くどくも問まいらせてもし御心にふれなば、ひら

に〳〵許したまはれかし、大切と存じまいらす御身の上に露いさゝかの事もあればと思ひまいらす心にめでゝ、あはれ御かくしあることなく、心の浮びたまはぬふしを』

『いへとおいやるのか』

『さにてこそ』

いよ〳〵恭々敷夫の面を打まもる』

『女の身の如何にもすべきよしなしとはさることながら、願ふはおほせたまはれかし』

『いふたりとて、かたりたりとて』

『さればさほどまでいふを、いはざるも由なし』

先きに見たりし馬の事を落もなく詳しく語る、語るにつけても折々の溜息はひきもきらず、價とふにそを答へもせざりしことの口惜さ、さりとてかゝるやからのこと咎だてせんはいとはしたなしと、胸を撫て歸る道すがらも、腑甲斐なき、我が身の上のうらやましく、貧なればこそ下賤馬方風情のものまでを、さげすまれしことの如何ともすべきにあらず、幼なきより夙に聖賢の道を學び又武士道の意地を心得、男たる身の命にもかへて大切なるは唯々心の潔白にして、黄白の金なんどはひらに町人商人の弄あそぶものなりといとも〳〵賤しみ來りつるものを今日にして我初めて知る其謬、誠世は黄金の世界なりけり、黄金あれば今日しも見つるかの駿足を買とりて、心のゆくまゝ飼にかひ、乘代となして身に從がへなば、やがて我が君信長朝臣天下一統の爲に起したまふ、處々方々の戰場に於て、功名手柄は心のまゝ、身を起し家を起してなき先人の名さへも起しなんものと、如何にせんさる望今の我が身に叶はんすべなし、何國いかなる人の廐につながん事なるにやと、かゝることまで羨ましく又口おしく、一身これに凝りて更に他なく、歩みかへる内とても歸りつきし今とても身にせまるかの駿足のこと忘れがた

く、むやくしと思ふ思の穂にあらはれしものなれば、ゆめ〳〵御身にかゝる事にしあらず、必らず心安めたまへ、身にも應ぜざることをおもひつめたる故を以てわけ知らぬ御身にまで暫しだも心をいたましめつることのよしなやと、一伍一什落もなく語了り、さて兩眼に涙をたゝへたり、妻は一々聞終りて、

『されば疾々其馬求めたまへかし』

いとかる〳〵と事もなげにいふを打けしてから〳〵と笑ひ、

『其馬求めたまへとて、中々にさる容易なることにはあらず、少なくも黄金七八十、百枚ちかくあらざればとても〳〵能はぬこと、流石御身は女じや』

言終る夫の詞の盡るをもまたで、やおら次の間に飾置きたる鏡臺の鏡手もたゆげに持きたり、

『いざ〳〵其馬早く入手に渡らぬ内に』

いひつゝ其鏡の函の底に二重三重と重ねたる厚き蔽を破さりしかば、ざら〳〵と音して顯はれ出たる色美くしく山吹の黄金百枚、

『いざ此金にて』

いふ妻の面をいぶかしげに打見詰打ながめ、

『何とてかゝる大金を』

『是こそは妾茲に嫁ぎし夕、母なる人の手づから下され、ゆめ〳〵夫の一大事家をも起さんといふの外は、唯の一ひらといふとも無駄に用ふることなかれと、かたくも戒しめたまひしを、今日まで守り、御身にさへもかくせしを、今こそ嬉しくも用にたちつれ』

『さにてありしかや〳〵、あつき御身の志ざし、第一は姑御前の御たまもの、遠慮とてなく頂くべし』

妻にあつく禮をのべ懐にして足も空、馬方のやすみ

居たりし明神の森へとんでゆく。

さきの馬方は今しもやおら繋ぎとめたる繩を解き、馬を引いて往かうとするところ、今一足遲かりせば、手をむなしくしてかへるべきに、危くも時の間に逢しは妻の思、姑の心の届しものといと嬉しく、前に立はたかつて聲いと高く、調子も合はず、

『馬方々々、其馬身が買てつかはす』

馬方も馬もだしぬけなれば驚ろいた、驚きながらよく〳〵見るに、さきの程ひちくどくも馬の事を聞た士、なにさんぴんめ、五人扶持や十人扶持のピイ〳〵が、何をいふかと思ながら、

『本眞に買て下さるのでがすか』

ひやかし半分なぶつてやらんといふ聲附、

『いかにも〳〵、早く身がやしきへ引け』

『そりや買つて下さりさへすりや引いて行ますが、中々高うがすで』

『いくら高くもよい、全躰何程といふのじや、さきのほどはきかなんだが』

「本來は百枚といひたひのでがすが八十枚で』

『それは安い、百枚に買てつかはす』

言ひながら、懷中の金包のまゝにて馬方に渡し、

『サア金を渡すからはやくひけ』

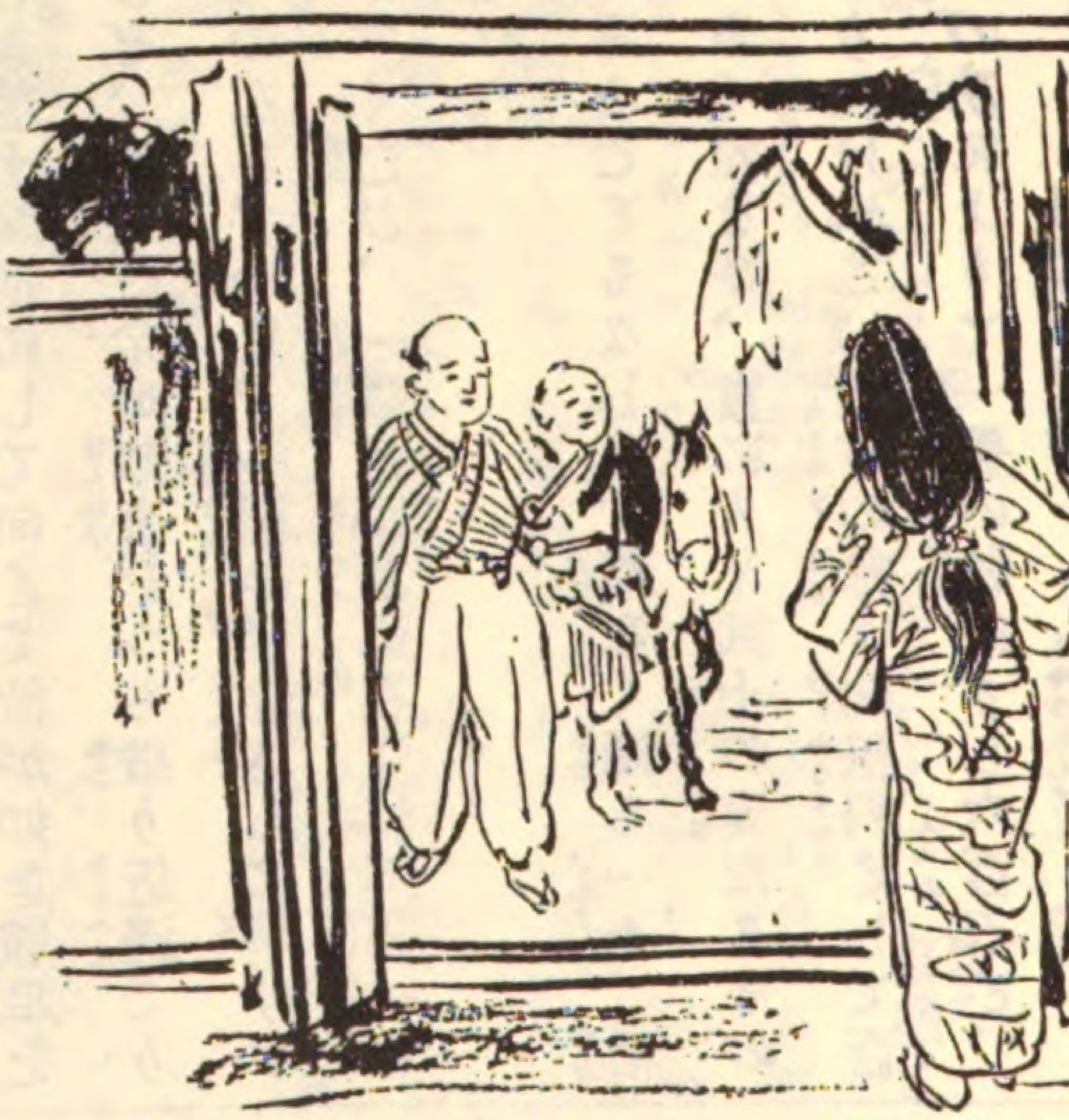
馬方は今更の樣に驚きながら、急に腰をひきく、矢鱈とお辭誼ばかりして、敬白の百萬だらもいひながら、馬をひいて後につき行く。

馬方をつれ馬をひいてかへる夫のよろこばし氣なる素振を見て、妻は我身の上よと喜び、いとはし近く表口の處まで出むかひ、夫には喜をのべ、よろこびのあまり馬方にまでも詞をかけた。

馬方は命ぜらるゝがまゝに、後の廐に馬をつなぎ、禮をのべ金を懷にして立かへつた。

是よりは夫婦して宛然に我子の如く朝な夕なにいたは

りて、飼にかふ程に馬は次第〳〵に肥太り唯さへもよき駿足のいよ〳〵立派になりまさり行くにつけて、妻の心姑の賜の恭なく、頓て其馬に姿見といふ名を付けたのは、姿見の鏡の函の底より金を出した、妻のを忘れざるがためである。



其あくる年の春、信長は日頃の企とゝなふて、美濃の齋藤を攻めうつた、一豊は此時なりと名馬姿見に貝鞍置き先祖傳來の着長にいか物作りの太刀佩いて三軍の師に打交はりて立出たる其扮装の立派さ凛々しさ誰ありてこれを身分かるき徒士と見るべき。

鐘鼓響き渡り、旗幟天に翻かへつて、いよ〳〵両軍相對した、齋藤は年來の居城に恩顧數千の武士に擁せられかつ又前に控へたる木曾の流を要害の第一と頼み、むれ來る敵を眼下に見下してものゝ數ともせず、更に驚ろくこともない、氣早なる信長はいとも〳〵はがゆく思ひ、誰か余がために敵の膽玉を冷すものぞと、日毎櫓に登りてうちまもる。

一だんの薄霞に敵の城のと見ゆる朝まだき、滔々たる流れを横ぎる武者一騎、敵の矢玉にかけなよとて、各〳〵つゝいて押渡る、信長は是を見て、さても小氣味なき味方の有様、頼母し〳〵、さるにても先登を企だてし者こそ誰なるやと、尋ねたまへば側をさらぬ木

下藤吉郎遠目鏡にすかし見て彼こそは御徒士山内一豊とまうすものにて候と答へた。

身がらいやしき徒士風情にして何とて彼が如き駿足を身に從かへしぞ、さては余が禁令をうち破り近邊よりかすめ來しものならずやと、一團の疑念さらに解けず敵軍茲にたやすく亡び、一豊は御前に召されて第一に馬の事を糺された。

今更に包かくさんこともなしと、落なく語る一々、信長は殊の外にめでたまひ、實に〳〵武士の妻たるもの誰も斯こそありたけれと、感賞の餘り化粧料として百石、先登第一の功によりて一豊の給はりし六百石と、夫婦合せて七百石の所領を基礎にして昇進年と共にあやまつことなく、榮へ〳〵て明治維新の時までつゞきし山内土佐家の祖先、成功は一にも二にも、世にたぐひなき奥路子の方の内助による。

（尾）

やんちや姫

一栞庵主人

（上）

女大學、庭訓、今川などの昔氣質も、一概に放棄たものにあらずと菊地子爵の令孃、名をば豊姫と申さるゝは早や肩揚の氣になる御年齡、御標緻も吉野の花の、千本が中にも隠くれ給ふまじき勝れたる所ありて、目の毒と知りつゝ振返へる若者も多ければ、晏子のそれにあらなくも抱車夫の喝道、姫をのせて走る時ばかり常よりはどふやら勇しきもおかし。

子爵は御身六十路をも踏ませ給へて、御子といふは唯後にも先にも此姫ばかり、内外の分ちなく『姫が〳〵』との御自慢、親馬鹿と笑ふ所を御無理もなしと人はゆるしぬ、奥方は素性を問ふ丈け野暮の除者にさるゝ巷より子爵の御目鑑に預り御側室と申され給ひし御身の、先奥方御他界ありしと共に、今は束髪に品性をつ

くりて、子爵夫人と交際社會にも持囃されぬ。『讀めたり……災も三年たてば役に立ツ、况んや○練○管に於てをや』を餘り可愛がられぬ玄關番の書生の悪口、飯焚に『シッ』と睨みつけられて、殼栗頭を掌もて押さへ、頸をちゞめ舌を吐きし有様、龜八の細工に寫させて見たし。

父が絶えず叱つてのけて其上母が嚴くしては、自然と子心の小さくなりて、何事にもハラ／＼とするからに鼠がカタリとしてもギヨツとすること笑止なり、父が四角に出て母が丸く出る、四隅に自然とくつろぎなりて、やつと子の身の立瀬となるなど、面白くもなき事のやうなれど、咬〆めて見れば味のある鰹節、きくきかぬも躾方一ツにあるぞかし。

然るに子爵も丸く奥方も丸くあまやかしてかゝれば、豊姫は楕圓に三角に、それは／＼手のつけられぬ我儘、隨分子爵にもこれはと流石に思ふ節もあれど、機嫌を損じてはと我を折つて、今少し物心づきたらばと慰めぬ。

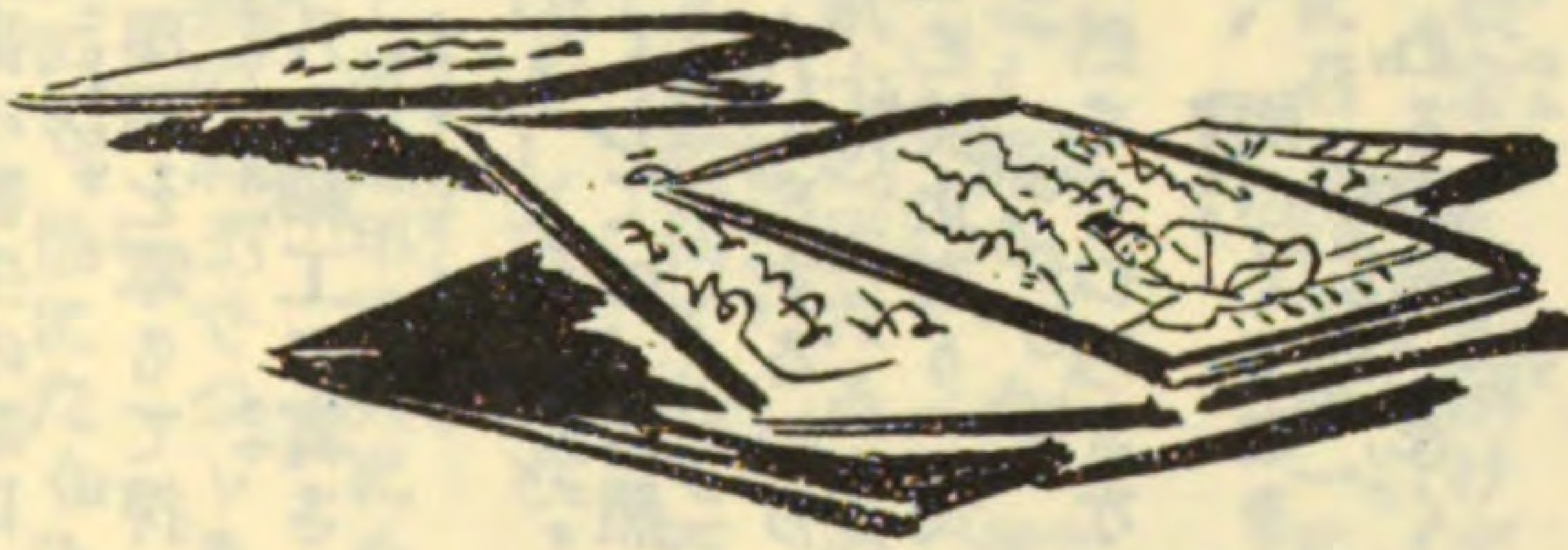
兎角する内姫には十八歳の春を迎へ給へければ、子爵御夫婦にも氣に入りたる好き婿をとりてと、夫とはなく心をくばり給ふ。

（中）

正月といふ名をかりて、身分あり地位ありて妻なき、猶成べくは舅姑小じゆふとなくして才智あり、交際は上手なるもよけれど餘り優遊好ならぬ壮年を、何處如何なる處よりすぐりてか、十名程呼集め、豊姫の友達にはわざと美しからぬ姫達をのみ招き、奥方侍女乳母等も打交りて、盛なる歌牌會を催ふしぬ、奥方の軍配少しもぬかりなし。

次で第二回目の歌牌會は開かれぬ、すぐられたる十名の内五名は招待に洩れ、三名は彼方より斷り來れり殘る二名こそ大事の／＼のお客なりけり。

一人は同族松波男爵の次男辰雄と呼び、大學文科に修業中の身の上、凜として氣高き内に愛嬌ありて、色白く中肉にして、學友の間に評判の美男子、今一人は内閣書記官の顯職を奉し、年の若きに似ず才物とたゝへらるゝ葛目幸信、御容貌は辰雄樣に勝るとも劣りはせじと、一人の侍女が目を細くすれば、奥方は圓くして睨らみ『お前方がそんな事を申すときゝませんよ』と叱りぬ、侍女は心に不平なり、『人をツ……戀に上下がある者か』其實此侍女とて、戀などゝ騒くべき御面相にもあらず、唯自身のみは鏡臺に向つて經營慘憺の結果、少しく口をすぼめて、成丈け横顔を見するやうにすれば、多少鼻の低きが瑕にもせよ、鶯鳴かせる程の價値はありと、堅く信じて疑はざしなり。



第三回の歌牌會も、辰雄と幸信との二人のみなりし、子爵の意は辰雄に落ちぬ、奥方も其意を領して、姫の心を辰雄に全くむけんとつとめたり、去れど豊姫はやゝ幸信に傾きたるものゝ如し、試に第四回目は辰雄一人のみ招げり、姫は心地悪しとて其席に臨まず、坐はさん〳〵にしらけて、手合も一二度ありたるのみなりし奥方の掛引未だ及ばざる處ありけん。

（下）

頃は嵐を厭ふ花の彌生、子爵御夫婦は或日豊姫を一室に招きて、『辰雄は後來望のある青年、殊に同族の好もあり、今度和女に添はせて、當家を繼がせる考だが、よもや異存はあるまいの、』『學問もあり御縹緻もよし男らしくキチンとした内に、又何處となく御やさしい所もあつて、辰雄さんなら申分はない筈、何にも耻しがる事はないから、能く考へて御返詞をなさい』と說

付けてかゝるを、姫は眞面目になりて顏も赧めず、『オゥ厭やな、辰雄さんのやうな御亭主を持つ位なら、一生獨身で居た方が餘程氣樂だわ、葛目さんのやうに氣作で、人づきがよくつて、思やりがあつて、一寸顏が榮三郎に似て居て、姿までがすらりとした方なら嬉しいけれど、全躰辰雄さんは書生〳〵して居て、剛情でぞん氣で、あんなえやな人はないのよ、阿父さんや阿母さんが惚れたつて、妾の御亭主にする事は出來ないわ、妾しやァ疾つくに葛目さんと御夫婦になる約束がしてありますよ、今更らそれを破る事は不德義じやァありませんか、阿父さんも阿母さんも不德義な事をしろと御勸めなさるのですか、』奥方は其口前にあきれながらも、何をか目もて子爵に合圖すれば、常になく子爵は聲あらゝげ、『默つて居なさい、不德義とは親々の許可も得ずして、勝手に夫婦約束なぞをするのをいふのだそんな馬鹿者は娘と思はんから如何でもするがよい、斷然辰雄を養子として、當家は相續させるから、大二壓制だ……親を親とも思はぬやうな奴は、壓制でも腕力でも差支ない、昔ならば手打に致すべき所だ』との權幕には流石に姫も驚きてワッと泣入り給ふ『サァそんな我儘をいはないで、阿父さんや阿母さんのいふ事をおきゝな』とすかして見れど、どふして〳〵、姫は袖をかみさき、襟をくひきり『口惜しい〳〵、葛目さんと御夫婦になれなければ死んでしまいます、』と荒にあれて、奥方のとむるもきかず、車夫を叱りつゝ車を命じて、番町まで速いでおくれ』奥方は玄關番の書生に命じて、車夫と共に力を合せて姫を護らんが爲めこれを追はしめぬ、子爵は奥方に向ひ『やつぱり怒つて見せても駄目かの、』奥方は吐息して『どふでも葛目さんに添はせる外仕方がありますまい』

一番町に廣やかなる庭の松を見越して、何流とか好みのありさうな門搆、これ彼の葛目幸信が住居なりけり

幸信は妻といふものなけれど、侍女の於梅とよべる仇者に何時しか戯れて、他の奉公人も於梅ばかりは樣付にする程の秘密その一家中の秘密も世に知られねばならぬ時來れり。

幸信宅調と稱して此二三日引籠りつ、於梅に酌をさらせて逸に入る折、突然訪ひ來れるは豐姬なり、迷惑ながら客間に通して逢へば、『兩親と喧嘩をして飛出して來ましたから、御約束通り今日から妻にして下さい』しとの直接も直接短刀直入の談判、ハッと幸信當惑の折柄、柳眉逆立てゝ躍り込みし於梅、『何處のお轉婆娘だか知らないか、葛目さんには立派な御新造がついてますよ、ナニ何處に居るとへ……フン何處に居るものか、かふこふ於梅さんの事サ』『こら於梅そなんな不躾な事を……』『オヤおかしな事を仰しやるのね、今更袖にされて指をくはへるやうな女とは違へますよ、サア旦那何が不躾で御座います、』と長居せはつかみかたりもすべき有樣、豐姬は戀もさめ勢もぬけて、迯ぐるが如く我邸にかへり『阿母さん、葛目さんは見掛によらぬ不人情な人だわ、口前ばかりよくつて輕薄な人なのよ、妾しやアもふ〳〵見るのも厭なの、來たつて寄付けもしないわ、やつぱり辰雄さんがいゝことよ、辰雄さんに限るわ』誰いふとなくやんちや姬の名は立ちけり、やんちや夫人とならずんばまだしもなるべし（完）

青小僧

蕙香女史

寡婦ジヤコベーの住居する家は停車場の前に二つの道ありてその出あふ右の角なりき狹けれど新らしく四邊は人の家居もなく樹木茂りあれてまわりは石垣に取圍まれ屋根はすべて瓦もて葺かれたり、ジヤコベーはそも此年の七月恰もプルシアと開戰の詔敕ありてその末

子なるアリスチッドハムーヅの軍隊と共にベルダンに向ひて出發せし後この家にこそは住ひけれこゝに移轉しつる所以は、停車場に近く萬づ便よけれはなり、起居擧動優に賤しからずおのが子を慈しむ事深く戰より歸り來なば直ちにかれの腕にとり縋らんその折の樂しさはいかばかりぞと空想を胸に浮べつゝ日を送りぬアリスチッドは大切なる此家の室にて今一人男の子あれど母の心にさからひてとある者と赤縄を結び今は巴里に住みけるとぞ此時より親子の中らひは疎くなりてたゞ親の情は末子にのみあつまりきアリスチッドは軍隊と共に出立せんとて用意の物に充たされたる袋を手に取持ち母の顔に接吻なして勇みにいさみて門出したる其のをりの親の心やいかなりけんたゞかなしさにうちえめりぬ、哀れなる母は規則通りの日數に到着する書簡を讀ては初のほどは心を慰め居たりき然れども間もなく末子が駐在せる地も獨逸の兵に襲はれて村落はババリアの二軍隊によりて占領せられ通信の途も殆んど絶へて手紙は日限も不規則に持來たる配達夫に依賴して送り屆けたり、最後の手紙は八月卅日セダンの近村にて認めたるなり其後は何にの音づれさへなしアリスチッドは打死なせしかまたセダン陷落の時捕虜の身となりしかあはれやヂヤコベー夫人は確かなる報らせを得る能はざりき最もたゞ一つの慥かなる事實は八月卅日以來音信絶へしばかりにて死亡せる通知さへ今日までもなければ寡婦はアリスチッドが死せりといふ事を考ふる樣もなしまた考ふる事をも願はざりし常に獨言していひけるは

かれは必ず筆とる事さへ、かなはぬ廓内に獨逸兵のために幽閉せられたるは疑ひなし然れどもこの恐しき戰のやみなば再び歸り來べし

とヂヤコベーは朝夕心の内に待ちわびたり

其 二

冬の長き月日もすぎて巴里の包圍もとけて平和をつくる時の來れりと夫人の心は熱中せる希望より胸の鼓動いよ〳〵高まり始めぬ、捕虜も送還せられはや其途にのぼれり若き者二人三人は既に歸り來たれるもあり停車場には顏色蒼ざめ破れたる衣など纏へる虜の歸り來たれる事恰も潮の湧く如し、くぼみはてたる眼の中にも故郷をまのあたり見るものから嬉しき光りのあとなく輝きわたれりジヤコベーは獨逸より到着せし汽車より下る者どもは一人も殘らず取調べかつ彼の地に在りし人々に尋ぬれど誰れひとりアリスチッドの音信を齎したる人もなしセダンの陷りしより此かた顏さへ見し事なしとか、中なる兵卒はいへるやう鏖殺せられたるといふにもあらず恐らくはアリスチッドは敵國に於て或る暴擧を企てゝプロシヤの暗き囚屋の内に繫がれ居るとの噂さなり、とジヤコベーは日毎に案じわづらひて、獨逸政府に幾度となく安否を尋ねぬ、夜毎にこの新らしき家の食堂には冷たきスープ葡萄酒の壹罎さては食器取り揃へさへわたる汽笛の音に胸をいため耳を聳て窓打つやよひの雨を心の中の哀しみと共に聞つゝ待くらしけり。

其三

一夜雨つよく降り來て暗き夜最終列車はストラスブルクより着せり此日こそ捕虜の送還せらるゝ最後の日にして今しもプラツトホルムはこれらの人にて充されたり終なる車より辛うじて下りたる兵卒ありき足のあゆみもたよ〳〵と力なく身は疲れて瓦斯の光りにすかし見れば顏の色は蒼白く、明日ならでは旅路を續くる事もかたきにや、旅宿の在る所を尋ねたり停車場より遙に隔たりし所ならではなきよしをきゝて人よりはおくれて停車場より出で行きたり。既に町々へと立ち去る旅客の姿は消えて見えずなりしが此の一人は四邊も烏羽玉の闇の中に旅宿を求めたり力なき足を泥にうつも

れつゝ暗き道をさまよひける一歩すゝむ毎に肩に擔へる袋の内なる銅の盃は物に觸れて響くも何となく物凄しこの暗夜の中に哀はれげに孤立せる家を見出したり窓に映る燈火の光り影淡く見えぬこれを旅宿ならんと考へつゝ戸の側にたゝずみて手もて探れば呼鈴あり、うち喜びて、力限り押せばやがて窓の火影は光りもそれで何か獨り物いふ氣勢なるに、靜かに聞けばくるしき聲音して、

あゝ今度はわが子にてありけるよ

と叫びたるなりき。足音は次第に玄關に近きぬ戸をひらくときに兵卒は一人の老婆を認めけり老ひたる女は驚きつゝかれの顔をうちまもり思はず聲あげていひけるは

神よわが子にてはあらざりしか……

寡婦はいたく感動しかつ人違ひなりしに落膽なしつるさまに見えければ兵卒は答ふるやう

彼處にてきけば旅宿のこの近傍に在りといふ事なりしが故心付て御身が家の門をたゝきしなりされどわれはとく此家にて非ざる事は知りたれどいかにせん躰ははや綿の如く力もなく疲れはてゝ一歩も進むべくもあらず

とジヤコベーは暫時言の葉もなくたゝずみて居たりしがこの若き兵卒の容貌も年齢もわが子に似たれば心動かされ哀れを身に感じて落る涙は頰のあたりをつたはりぬ。

いざとく入り給へ、かゝる天氣につかれはてたる人を知らずかたに歸さん事は神の心にも叛くなるべしわが子の身の上を思へば今頃はあやめもわかぬ闇の夜に名もしらぬ村に一夜のやどりを求めんと探すやもはかられず

といひつゝ内にぞひき入れける肩に擔へる袋も下ろさしめスリスチツドの爲めに日頃より用意せる冷たきス

ープを與へ自からは側にて給仕しつゝ行衛もわからぬわが子のはなしをつゞけぬ、彼が食事を終りし時は早やくも眠を催して堪へがたき様なれば我子の美はしき部屋に導きて臥せしめたり、あくる朝兵卒は衣服をあらためはや立ち出んとしければおし止めまづ朝餉を與へつゝ再びアリスチッドの物語を始めぬ「あわれなる子よ、如何ばかり外國にて今もくるしみ居る事ならんかれは自家にて我儘に育ちし人なりかれが戰に門出するをりわれは青き色の毛糸もて頸巻きを編みて與へたりそは日頃神經痛にていたく惱み居れば頸あるは耳などの寒さにたへんが爲めなり、此の冬の烈しき寒さの夜半に用ゆる事を心づきしやいかにと案じ居たりき兵卒は食事もなさずつら〳〵思ひかへせばセダンの平原におのが中間は繋がれて恰も獨逸の番兵が羊の群を守るが如くわれ〳〵を見張居たりその時わが側らに寡婦の語りし人と露たがはぬ若き兵卒の坐して居たりき青き色の頸巻をえりに纏ひたり、戰は破れて物騒がしき中にも捕虜はその有様を見て笑ひのゝしり、はては青小僧となん呼はりぬある夜故さとに殘れる母の戀しう思ひ出でたりけん例の青小僧は逃亡せんとて辛うじて二十歩あまりも進みし折番兵は後より鐵砲うちはなしたりいかでか、たへらるべき、其場へ、どつと斃れて其儘、いき絶へはてぬ、たゞ青き色の頸巻にとりまかれたる顔の一層青き影をとゞむるのみと、兵卒は席をたちて、あはれなる寡婦に禮を述べつゝ

御身の愛子はほどなく歸り玉ふべし多くの佛蘭西人は獨逸に殘り居れり必ずアリスチッドは歸り來玉ふならん

といひつゝ袋を肩にして其か家を立ち去りたり兵卒は家の影見えずなるや急に、蹈みとゞまりて、はふり落つる涙をおしぬぐひ、獨ごちしつゝ、實にいたはしくもあわれなるかの婦人よ、青小僧はいかでふたゝび彼の家にかへるものかは。

觀石會

近來府下にて非常に水石流行し其道の好事家益々增加せしを以て今般有名の植木師香樹院、百艸園、淸大園、苔香園、等幹事となり千樹園、薫風園、蘂溪園、巖樹園、萬樹園、勝文、田口松旭の人々補助となりて去十九二十日各自愛藏の奇石類を陳列し衆人の縱覽に供したり、兎流行、百年靑流行、目白流行、なぞ〳〵流行も亦いろ〳〵なるかな

談叢

復讐　けんこん

村で一番のなまけものが、どうした機會か今日は野やまから大きな野雉を捕つて來た。そこで村中の誰れ彼れも寄つて集つて、物珍らしく、イヤ優曇華に花の咲いたとはあいつの事だ、太郎吉奴、貴さまどうして其れを捉まへた、近頃勿怪な手柄をしたぞと双方で褒めるやら、そやすやら、ところで太郎吉は大の得意になりこゝは一番乃公の手柄話しをして聽かす處であるとそも〳〵今日手ぶらで、ぶらりと野山へ出て行くと向ふからケン〳〵雉子の聲がするから惜しい事には生憎鐵砲を持たぬこいつは所詮礫では行くまいと言ひさま踏込んで見ると尻毛の長い太い狐めが葦の中から唐突飛び出しておれの顏を畜生奴が眞さか泥もくつ着て居まひのにキヨロ〳〵と睨め廻わして逃げて仕舞ッた。これはしたりとやゝしばし魂消て見て居ると頸ッ玉へ負傷した儘で血をばた〳〵落しながらおれの足元へ轉きして轉がり出したのはこの雉子だ、何とえらからふえらいものであらふ。

相手の次郎作や三吉もこれを聽いては唯默ッては居れず、どうだい狐のせしめた喰物を橫取りしたものなら皆んなに振舞ッても罰は當るまい、いつそ其いつを殺にして今夜たらふく呑ふではあるまいかといへば、奇妙々と立所に贊成者が五六人出來て、怠惰相應の考

へから、酒やら豆腐やら、味噌、醤油は銘々の持寄りで宿は太郎吉の家ときめて早速火を焚す、鍋を洗ふ、此の混雜の最中ホト／＼と戸を叩く者あり、誰れぞといひつゝ太郎吉が表へ出て見ると豫ねて見識れる隣村の村長殿がどうした狂言か知らねど片手に猪ほどな大兎を提て、立て居る、何と太郎吉や今夜其方に一つの無心があッて來た、明日おれの家で一寸祝ひ事をしやうと思ふに生憎鳥がないといふ騒ぎだきけば其方は今日雉子を捕つて來たさうなが若し出來ることなら其雉子を私しに譲ッて呉れまひか、其の代り用にも立つまいがこの兎を進ぜる、御禮はあとで澤山するからどうか取かへて呉れまいか、太郎吉殿どうか太郎吉どの、村長殿が態々の御出で加旃も折入ての御頼口上、其上兎と雉子との取かへこは此方に取ッて大變な利益だ、よろしい取かへやう、村長さま御易い御用かしこまりぬと兎を受取り、サァ皆んなの者兩肌脱いて料理せよと一匹の兎に五人がゝり皮を解く、肉を切る、積ッて見れば、肉は大砂鉢に一ぱい、テモ大さうあるものだなァと、其れからこの塲の喰振舞よろしく一同寄ッて集ッてうまい、うまいと言いつゝ呑むやら喰ふやらも束の間、何やら味が變ではないかと一人がいへば又一人、さういへば成程味が變だ哩、ハテ面妖なと銘々怪訝な顔する時忽然として戸外に聲あり「馬鹿物やいわいらは人間の身を喰ひ居るわい」とこの聲何となく不思議にきこえて氣味わるく銘々耳を聳だてたり。

こはそも何とあれはうさぎと思ひて料理せしにこれは大變、まだ生れてやつと二タ月ばかりと思はるゝ嬰ん兒の死骸あさましく刄にかゝりて無殘のさま眼も當てられず皆々呆れて言葉なく唯顔見合せて魂消るばかり彼の村長こそ曲物なりといふは今更の淺智慧、是れぞ隣村の穢多村で二日前に死んで假埋した墓塲の棺を發いて掘りだしたものと知れて一同あッとばかり明いた口も塞がぬばかり、實に悪戯の頂上ぞかし。

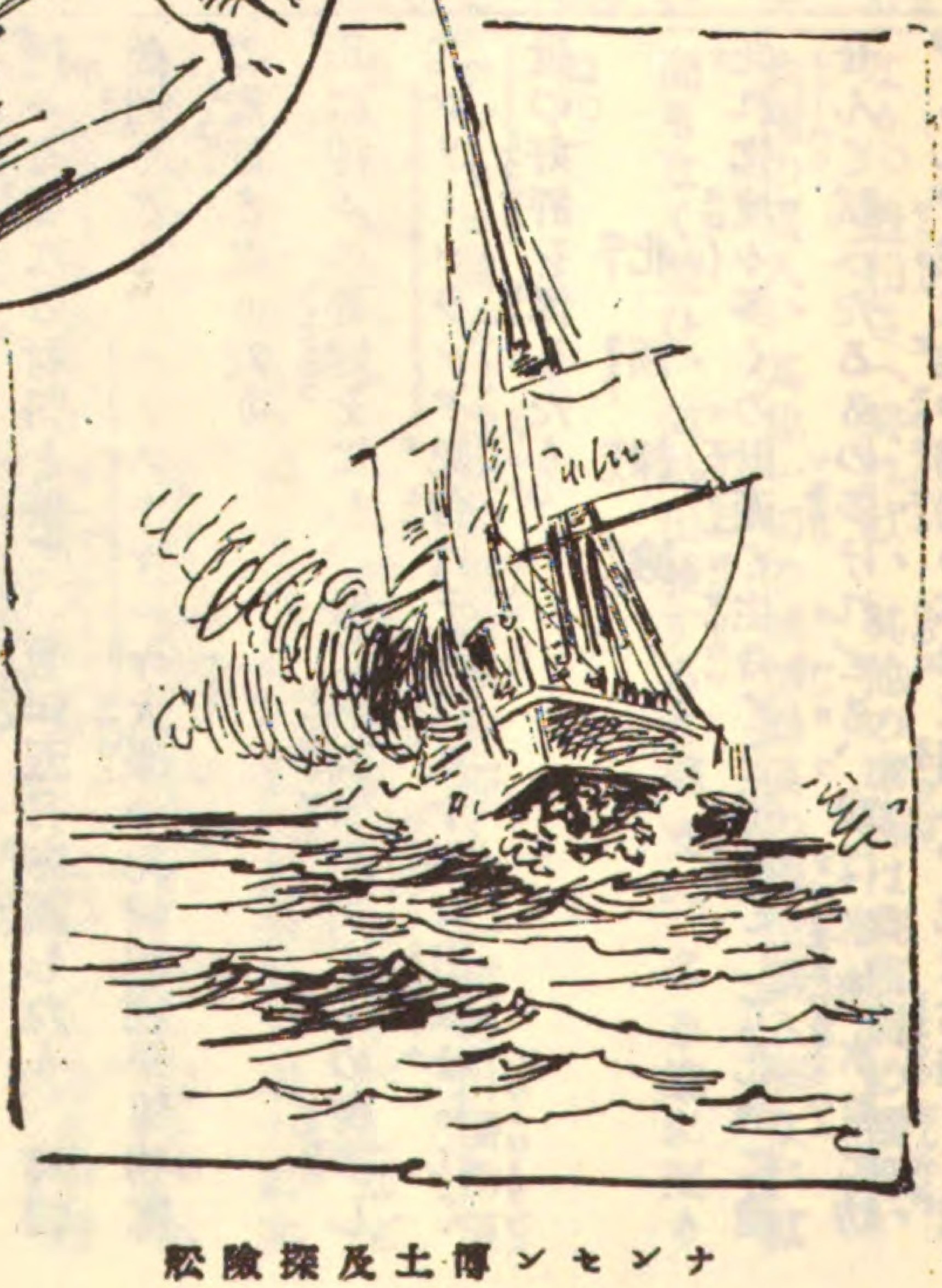
ナンセン博士

天水生

ナンセン博士と云へるは、名高き北極探檢家にして、歐羅巴の北の端なる那威國の人なり。今より三年程前故國を發して北極探檢の途に上り、先頃無事歸國せりとの報あり、此電報が歐米各國に傳はるや、新聞に雜誌に此事を書き立て丶、福島中佐の遠征、郡司大尉の壯圖が我邦にて一時喧囂たりし如く、歐米諸國の大評判とはなれり。



ナンセン博士は其目的の如く北極に達する能はざりしも、之れ迄の探檢家が達したるよりは四度北極に近づきたり、即ちこれ迄の探檢家は北緯八十二度の所より北に達する事能はざりしにナンセン博士は八十六度十四分の所迄達せりと云へば、北極は其所より



ナンセン博士及探險船

僅かに三度四十六分の北にありしなり。今ナンセン博士の事に關して聞き得たる所を左に記さん。

畧傳

ナンセン博士は名をフリドジヨセフと呼び、千八百六十一年十月十日を以て那威の國都クリスチヤニヤ府に生る。廿歳にして、クリスチヤニヤの大學に入りて動物學を專攻せり。千八百八十二年即ち廿三歳の三月海豹捕獵船に乘りて、北の方スピイヅベルゲン、アイスランド、グリーンランドの海に航して、北洋の海產動物を研究し大に得る所あり、仝年の七月無事歸國したり。これぞ氏が北洋探檢の初めにして、他日北極探檢をなすに至りし好準備にぞありける。其年の暮ベルゲン府の博物館監督に任ぜられ、後數年の間は孜々として博物學の研究に餘念なく、時に北部不毛の地を探檢し、或は四時雪を戴ける高山に上りて、大に英氣を養ひ、傍ら學術の探究を爲すを以て無上の快樂となしたりき。千八百八十八年（明治廿一年）理學博士の學位を得たり、これ氏が熱心學術研究に從事したるの結果なり、時に齡廿八。同年五月グリーンランドに航して、普く氷原氷河の間を跋涉し、かの大陸を東より西の端迄橫斷して、かの地の氣候地質動物植物等を探究し、種々有益なる材料を得て、翌年五月歸國したり。歸國後間もなく、クリスチヤニヤ大學の比較解剖學博物室の監督となりたり。

氏は種々の著述をなし、殊に解剖學に關するの書多し其グリーンランド紀行は千八百九十年に出版せられて世の好評を博したり。

北極探檢

此れ迄度々多くの財產と生命とを犧牲として北極に達せんと試みたるもの多けれども、或は氷塊氷原に妨げられ、或は途中難船の不幸に遇ひ、或は食盡きて餓死するの非運に遇ひて、一人として北極の地を踏みた

るものなかりき、那威國は歐洲の最も北に位して、北極探撿には最も便利なる國なれば、同國の國會は此好位置にありながら、他國の人に先ぜられては不名譽なり、且つ學術の進歩に少からざる稗益を與ふるとなればとて、北極探撿の爲めに二十萬「クローチル」を支出するの議決を爲し、其探撿に關する萬端の準備指揮をナンセン博士に委托したり、氏は非常の喜びを以て此大名譽を承諾して、早速其準備に取りかゝりぬ。

準備及び希望

準備の第一は北洋の航海に堪ふべき堅牢なる船を造る事なり。ナンセン博士は自ら指揮して直に其製造に着手し、千八百九十二年を以て竣工せり此船を「フラム」號と名け、長さ百二十五呎、幅三十六呎、總噸數八百噸、百六十馬力の機關を備へたる汽船にして、船底深くして圓く、堅氷の間に突進し氷山に衝突するも破壞の恐れなき樣に、堅牢なる木材を以て造る、何れの部分も圓く角を取り去り、三重の壁を有するゴツキ船なり。造船さへ終れば、其他の準備は乘組員の撰擇、食糧の買入、其他一切の機械器具の製造購入等なれば間もなく整ひ、何時出發するも差支へなき迄に至りぬ。」

ナンセン博士は從來の探撿家の如く、一定の計畫希望なく無暗に北にさへ行けば、遂に北極に達すべしなどゝ愚かなる考案を爲さず、既に事實に徴して確かに北極に達することを得るの希望と計畫とを有したり。氏の希望の根據たる事實は次の如し、是れより先き中尉ヂー、ロング氏は北極探撿の目的を以て「ジアンチツト」號に乘り込み、千八百七十九年ベーリング海に向て航し、日本より來る暖流がベーリング海峽を通過して北流するを見、或は北極に達するならんとの考より此潮流を利用せんとて北洋の間を漂泊する事二年、終に同船は氷雪の爲に沈沒するの不幸に遇ひたりしが、

其後三年を經て、グリーンランドの西南岸に於て、同船躰の破片及び器具等の漂着し來れるを見たり「ジァンチット」號沈沒の塲處とグリーンランドとは北極より云へば丸で正反對の位置にあれば、ベーリング海より北極を經てグリーンランドに達する潮流の存在するにあらざれば、此事なかるべし。此事實は一時世界の注意を引き、學者間の一問題となりしも、其後十年の久しき誰一人として之を實地に探撿して其存否如何を明かにせんと試むるものなかりき。此處に於てナンセン博士は此潮流の存在を確信し、大膽にも此潮流を唯一つの希望として北極探撿を實行せんと計畫したるなり。

出發及び航海

ナンセン博士は千八百九十三年(明治廿六年)六月廿五日同志十一名と共に「フラム」號に乘り込み、那威國クリスチァニヤを出發して、北極探撿の途に上りぬ。初めの程は那威の海岸に沿ふて航行し、ジャカー海峽を經てカラ海に入り、更らに西比利亞沿岸を東北に向て航し、九月廿二日に至て愈々航を東北に向けて進行せしが、北緯七十八度五十分東經百三十三度三十七分の處に於て堅氷の爲めに鎖されたれば、全く機關の運轉を止めて、氷塊と共に潮流に從て北流せり。是れ却てナンセン博士の豫期せし所にして、とても船は堅氷雪塊の間を無事に進航する能はざれば、寧ろ氷塊中に固鎖せられて、此れと共に漂流するの安全なるにしかずと信じたるなり。

北航するに從ひ、温度次第に下りて、終に寒暖計の水銀は凍りて用を爲さゞるに至り、酒精寒暖計は零度以下六十度を示せり、此烈寒の内に在りても船員皆な健全にして能く其職務を盡したり。而して此間常に氣象天文學上の觀測、磁力の驗定、生物の探究、其他海底の淺深、海水の温度及び鹽分の多少、潮流の方向等の

測定に從事し、種々の新事實を發見したり。四面皚々たる白雪氷塊にして、土地なく亦海洋を見ず、只僅かに所々に堅氷裂開して、狹隘なる水路を顯はすのみ。「フラム」號は潮流と北風とに追はれて、冬春の頃は迅速に北航せしが、夏來りて北風止むの候は進航止みて却て南方に逐ひやらるゝに至りしも秋風吹き始めし頃なり再進航を始め、千八百九十四年十月二十一日には北緯八十二度の處に達したり。かくて「フラム」號は氷塊に鎖されたるまゝ潮流と北風に追はれて北航せしが、温度益々下り、氷塊途を塞ぎて、終に進航すること能はざるに至りたり、此時船は既に北緯八十四度の處に達し居たりき。

氷上橇行

此處に於てナンセン博士は船を捨てゝ、氷上を犬の引ける橇に乘りて北進する事に決し、海軍中尉ハンセン氏を伴ひ他の十名を船に殘して出發せしは千八百九十五年三月十四日なりき。かくて零度以下四五十度の寒烈なる北風に吹かれつゝ氷の砂漠を北進せしが、北緯八十六度十四分の處に到りて、氷上の危險益加はり少數なる犬は皆々疲れはてゝ到底進む能はざるを知り、千秋の恨を飮んで引き返す事となり、西南フランツ、ヨセフの地に向て橇を驅逐せしは四月初旬なりき。其頃より食糧漸々欠乏に陷り終に犬を殺して食ふに至りしが、六月廿二日大海豹一匹と三匹の白熊とを射殺し、之にて當分食糧に欠乏するの憂なく、生き殘り居たる二匹の犬は此肉にて充分飽食せり、此時博士は白熊の襲撃に遇ひて、將に生命も危からんとせしが、手早く之を射殺して終に虎口(否な熊口)を免れたり。

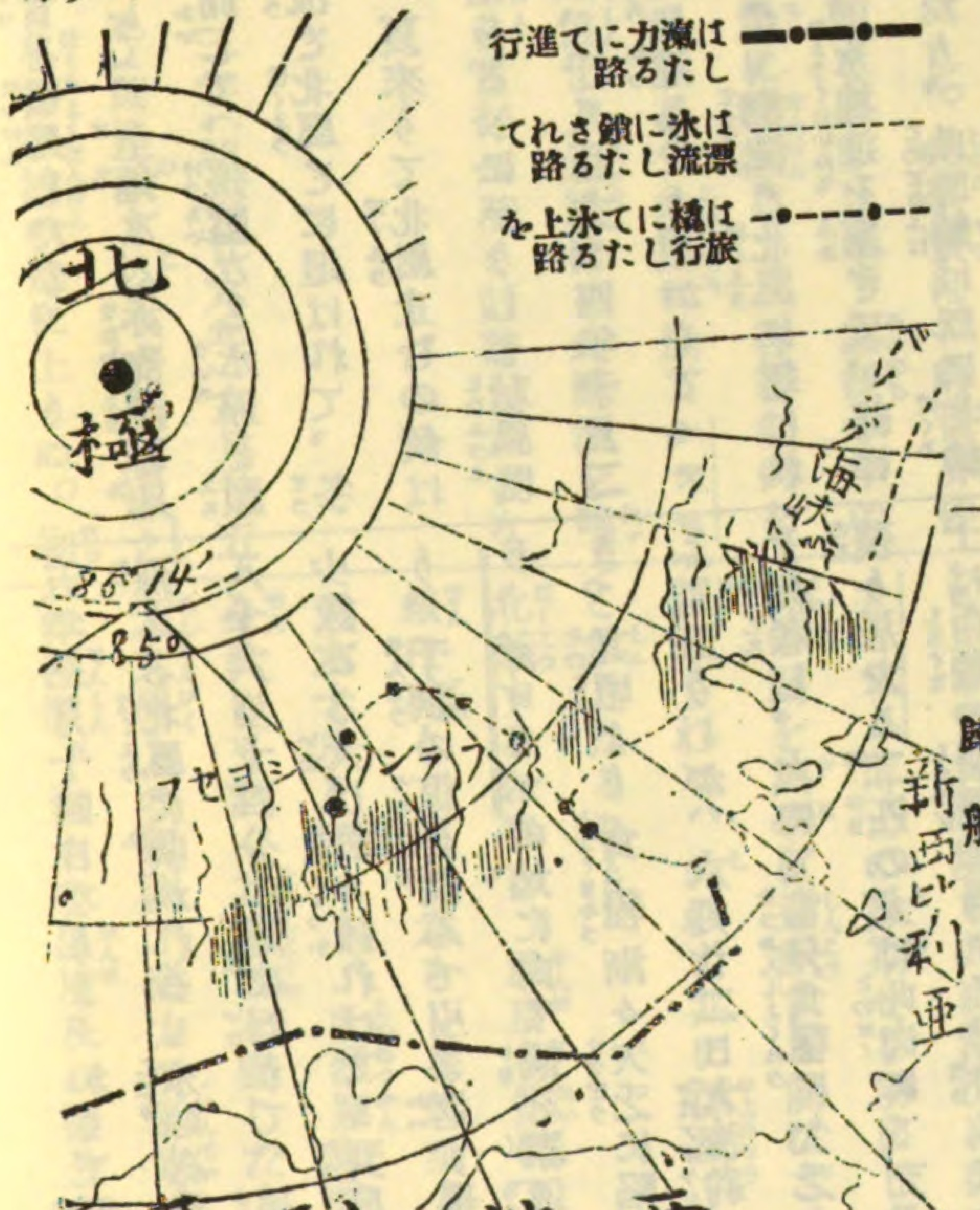
かくてナンセン博士は途中種々の艱苦を嘗めて八月の下旬フランツ、ヨセフの地に達し、此處に冬籠することに決し、石と土とを以て家を建て、海馬の皮を以

て屋根を葺き、其上を雪にて被ひ、亦熊皮を以て寢床を造り暖かに眠るとを得る樣になし、かく充分冬籠りの用意も出來たれば、此處にて無難に越年し、翌年（即ち本年）五六月の頃同地を發してスピイツベルヂンに向はんとの計畫なりしに、計らず次の如き奇遇こそ起りたれ。

奇遇

本年六月七日ナンセン博士はフロラ岬の東南にて、計らず英國の北極探撿家ジャクソン氏の一行に邂逅せりジャクソン氏は二三年前英國を發して北極探撿の途に上り、昨年の冬以來ナンセン博士の冬籠せる地の近くに居を構へ越年せしも相方共に神ならぬ身の今迄之を知るを得ざりき。目的を一にし、危難を一にせる同志が、此無人の氷界に於て偶然相會す、其歡喜何にか譬ふべき、且つ驚き且つ喜び餘りの事に一時は感情激昂して、茫然として立つこと久しく、後互に相抱て其無事を祝せりとなん。

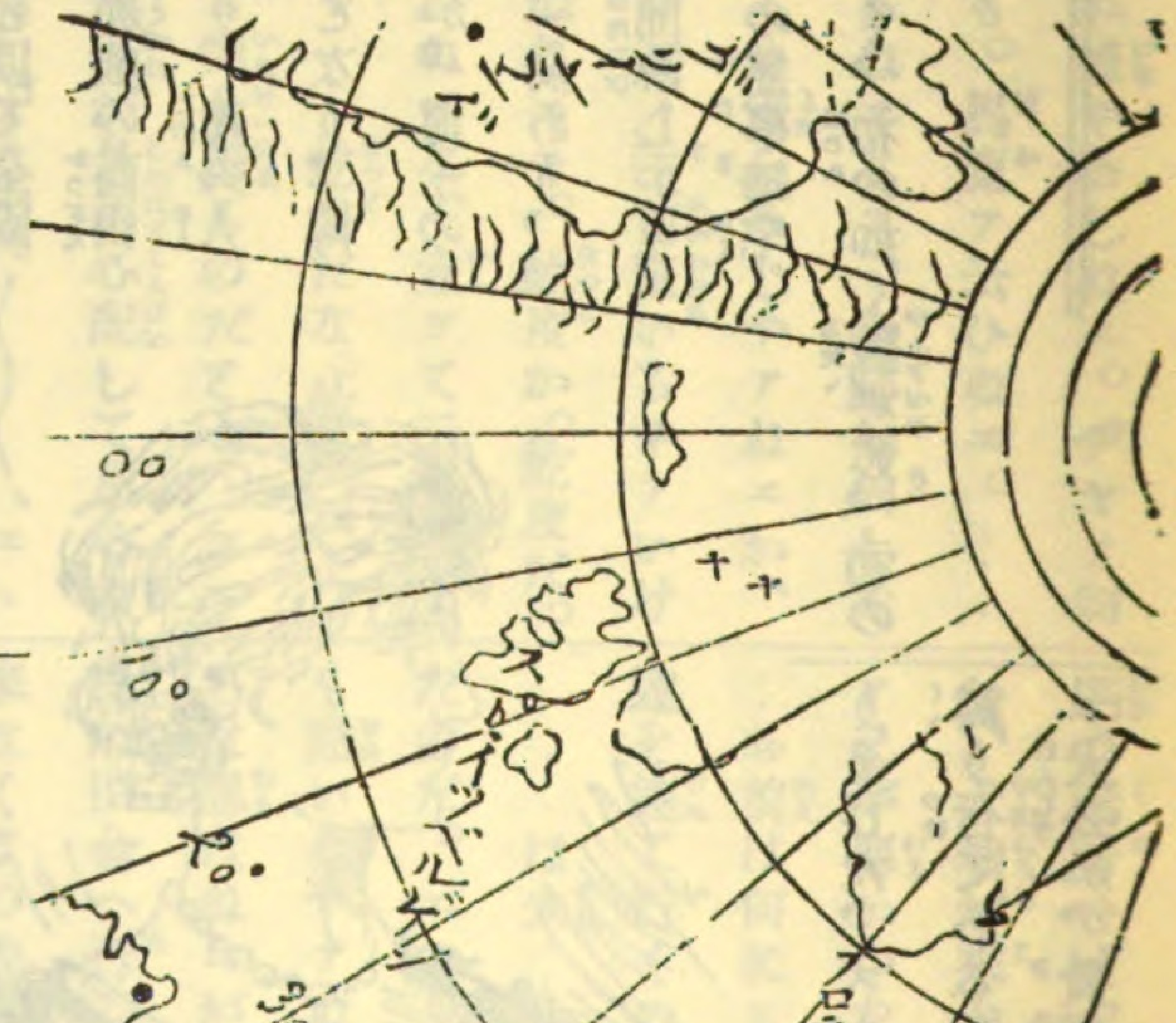
歸航



ナンセン博士北

かくて博士は導かれて英國探撿隊の根據地に到り英國を六月十日に發して探撿隊に食糧を運送し來れる「ウインドウアード」號の到着

を待ちて、之れに便乗し、去る八月七日出發して、同十三日那威國ヴァルドー島に無事歸着せりと云ふ。博士は北極の地を踏む能はざりしを以て、千秋の遺憾とせりと雖も、其探究せし學術上の新事實新現象は必ず學界を益すること大なるを思はゞ、博士亦大に慰むる所ありて可なるべし。因に記すジャクソン氏の探撿隊は倘進で此地を探撿せんとて、目下其準備中なりと聞けば、今後益々有益なる觀測と探究とを實行して、愈々多くの新事實と新智識とを得て、遠からず之を世に發表するに至るべし。亦ナンセン博士か氷塊中にて袂別したる「フラム」號は、其



極探撿航路の間

役北緯八十六度十五分の處に達し、種々の艱苦と危難とに遭遇し、終に去る八月十九日無事歸國したりと云ふ。

ナンセン博士と其家庭

ナンセンは未だ三十九歳の壯齡にして、其丈六尺を越へ、骨骼あくまで逞しく、身躰の壯健なる事鐵の如く、曾て千八百八十九年外套なくて烈寒肌を刺すグリーンランドを横斷したるの强漢なる。氏は千八百八十九

年の九月クリスチニヤ大學動物學敎授たりし故サールス氏の末女エウア孃と結婚し、クリスチニヤの郊外ソサクッドなる眺望絶佳の地に邸宅を構へて、高潔なる家庭を形造りぬ。ナンセン夫人は容貌敢て絶麗ならざるも、聰明にして快活、亦唱歌を能くし、美聲を以て全國に鳴り、曾て博士に從ひて那威の高山を探撿せし勇壯なる婦人なり。此夫人にして初めて博士の好伴侶となり、博士を内助することを得べきか。博士の家庭には愛らしき玉の如き一女あり、本年滿三歳、此頃は三年の間淋しかりしソサクッドの家庭も主人の無事歸宅によりて、亦初の如く樂しく、初の如く暖かに、初の如く賑ひ居るならん。



ナンセン博士夫人

さんげ猿（上）

園部紫嬌

根岸邊の或る隱居樣の宅に、犬と猿と猫とが飼れて居りました、スルト或日の事、猿が例の如く庭の櫻樹に縛り付てある所へ、朋輩の犬が來て。ヤア犬公か、貴樣鼻の先が乾て居るぞ、風邪でも感やア

しねエか。なあに、風邪なんか感やあしねエ。チヤア何か乾てあつた手桶へ小便でも。馬鹿ア云ひねエ。……左様事じやアねエのよ。解らねエなア、全躰如何したつて云ふのだ、咄して呉れても宜らうじやアねエか、友達甲斐のねエ。咄すよ、ダガノ手前驚いちやアいけねエぜ。ウン〳〵決して驚かねエ于。屹度か。屹度だ。チヤア咄すが……屹度驚かねエな。宜ッて云ふ事よ……大丈夫か……屹度だな。屹度だよ。隱居様がの。ウン〳〵。明日田舎歸るのだとよ。フ、ン其奴有難や。オヤ、此畜生己が是程心配して居るのに、手、手前、汝ウワン〳〵〳〵。なんだ〳〵、エ、何を左様に怒るんだよ。エ、解らねエぢやねエか、己の身になつて見ねエな、田舎へ行く位嬉しい事アなからうじやアねエか、エ、お前だッて左様だらう、子僧に打擲られたり、下女に水をかけられたりするよりか、ノウ隱居さんとお前と己とお斑さんと斯様一人三匹で活計せば、此位面白い事アねエぜ、第一手前なんか、犬殺が來ねエ丈でも安心だらうじやアねエか。アア己が悪かつた、怒つたなア悪かつたがノ、猿公……お前は何にも知ねエな。知ねエたわ。隱居さんは己達を連て行くのぢやアねエのよ、お前と己とお斑さん……は夫……毎來る、萬年町の香具師の所へ賣れたのだ。エー。と計り猿は驚いて木から落る。隱居様も酷いじやアねエか。サ、其恨も驚きもサラ〳〵無理とは思はねエが、夫やア理も知ねエからだ、今度隱居様が田舎へ行くのも、息子さんが悪くッて喰ふ事が出來なくなつたからだとよ、夫で大概己達を賣た理も解るだらう、ダカラノ、決して恨んぢやア濟ねエよ、宜か〳〵。解た悉皆腹へ還入たか、其空腹も明日から。お主の爲なら仕方はねエはな。時に犬公お斑さんは如何したの。お前一番可愛さうだな。可愛さうだア、最早連て行れたのか。ナァニノ、田舎へ行くので荷物を

片附るに邪魔だと云て、置巨燵の中へ入れたは。エッ其奴ア可愛さうだの、時に犬公。何だ。己アお前に少と相談があるが、如何だ聞て呉れめいか。お前の事だ何なりと……マア咄してみねエな。夫ぢやア咄すが實アの己ア是から逃げ出す積りだがお前が一緒に行て來れると、剛氣と其處が都合が宜からな。オイお前夫やア本氣で云ふのか、何程面が赤いとッて醉て居るのぢや無らう。マアサ又怒るよ、お前好く考えてみねいな、夫りやア今迄は恩にもなッたらうが、今になつて香具師に賣るたア隱居樣も餘り酷いと云ふもんだ、宜か、マアサ己の云ふ事も聞きねエ、ダカラヨ己ア是から此所を逃出し。コレ猿公、何程三本毛が足ずとも、好く考えてから物を云いねエ、お前や己が斯樣やつて暮して居たのも……左樣だ〳〵。己なんざア夜も不眠番を仕て居るのに、手、手前は温い袖なしを着て、箱の中とは云ひながら蒲團迄敷て寢たぢやアねエか、そ、其恩も忘れて仕舞やアがッて左樣事が云はれた義理かい、エッ、エッ、エッ、オイ猿公、己が今云た事が氣に障つたら堪忍して呉れ、是れ此通りチン〳〵、ワンワン、お廻りでもお忍びでもする、コウ〳〵、是さ猿公、お前や己が賣れて行けば、幾分か隱居樣へ御恩報になるのだ、エッ頼む、此通りだ、ワン〳〵〳〵、是さ是程頼むに夫チン〳〵、夫ワン〳〵。フ、ン、犬公お前が何と云ても己ア可忌だ、可忌だと云たら黒燒にされて血道の藥にならうともマア可忌だ子。猿、イヤサ猿吉、是程迄に頼んでも、手前は此所を逃る氣だな。勿論。汝ウワン。と一聲吠ながら頭を覗つて嚙付と、毛を百本近く嚙取たので、猿公は吃驚敗北、櫻の梢でキヤッ〳〵〳〵。

此騷動を聞き付けて『忙しい中だと云ふのに何を仕やアがるのだ』と駈出して來た子僧が『此畜生』と傍に有た草箒を取が早いか犬の脊を打擲したので。ワンだ犬

を馬鹿に仕やァがる、不忠者を助けて忠臣を打擲すたア、嗟嘆悲む可し、此奴必ず溝鼠となつて善六の轍を踏まんと云たが如何だか、一目散に垣根を潜つてワン〱〱。

其晩、猿吉お斑の二匹は、何處を如何したか屋根へ脱出し。猿さんお前是から如何するへ。己か、己はお前山王のお山へ行けば三萬三千三百餘の親類があるから別段喰にやァ困らねェのよ。左樣かへ、私もさ三毛じやァ有し、糞しも好し、足を嘗る事あお前の知てる通り上手だから、雨降でも梅の跡を付る心配はなし、何處へ行たつて困りやァ仕ないよ。然し若し喰ふに困つたら本郷の切通に飴屋があるから其處へ行きねェ、猿飴と云やァ直き解るのさ、其處にやァ古くから己の友達が店番を仕て居るから尋ねて行きねェ、屹度世話仕て呉れるぜ。オヤ〱左樣かへ。何から何迄有難ふよ。禮にやお及ばねェ、お互だはな。アラ人の泣眞似を仕てさ。オッと左樣した氣じやァねェのよ、又逢ふ時もあるだらう。左樣さねェ、夫じやァ此所でお別れと仕ませうと。互に別離を告て猿公は向ふの軒へピョイ。斑は軒から大路へポン。

犬は翌日になつて見ると二匹とも影が見えないからァア不畜情(人情の誤植に非ず)な奴だと、軒下に寝て居ると、庭口を明て出て來た隱居樣が。白貴樣はの今日から他所へ行くのだ、宜か、ヨウ〱。と頭を撫てる所へ、肥た男が來て、首輪へ鎖を付け。夫では御隱居さん連れて參ります、アヽ白カ、白サァ是から己と一緒に行くのだ。白は今が別離かと振り顧り。御隱居樣、最早參ります、最早お別離でムいます。と涙ながらに申しますのが、唯ワン〱キャン〱人間には聽えますから。此畜生吠やァがるなと肥た男がグン〱引張るので。御隱居樣おさらばでムりますと、突然駈け出したので、肥つた男は汝逃げやァがるかと是も一緒に、

ヤッシッシ、ワンワンワン、ヤッシッシ、ワン〳〵〳〵。
例の班は、前晩から逃げ出しは出しましたが、口程には實際運ばぬもので、隱居樣が家から、半町程先の天水桶の上で、手水をつかいながら、行末を考えて居りました。オッと化粧過ぎて耳の上迄撫ると雨が降るよ、宿なしには大禁物さネ、夫は左樣として、是から如何仕て暮さうか、紙袋を冠つた樣に、後退ヲり仕て居ても仕方がないから、一層猫ぢや〳〵を踊つて、アア夫が一番だよ、屹度當るに違いないよ、彼唄はと、何とか云たッけネ、傘さして絞の浴衣で來るものか、オヤ〳〵是はいけないよ、來るものかの所へ行て、オヤ化物だなんて摑つたら、夫こそ大變、おしやます鍋にして喰べられて仕舞ふよ、何樣もオッチヨコチヨイとの考えはいけないものだネエ。なぞと思案最中、例の肥つた男に連れられて來た白犬を見て、ハッと驚く拍子に足が辷つて、溝の中へポチャン、其處が猫だから。ニャップップ、ニャップップ。

さて猿公はと云ふと、屋根づたいに新坂へ出て、其夜の九時頃鐵道踏切迄來ると、電信柱が一本あつた、此所が畜生の淺猿さで、何の氣もなく電信柱へ駈上ると、電線が何本もあるので、一寸腰を掛けると、フラリ〳〵と搖るから。ヤッ此奴ァ妙だわい、何樣も云へねエ心持だ、ハヽヽ、犬公も己の云ふ通り逃げ出しやァ、斯樣云ふ面白い目も見られるに、ベン馬鹿な奴は度し難いと、夫も左樣かネ、己の先祖は猿蟹合戰で、オッと彼時は餘り立派な事ァ云へねエ、讀者諸君是丈は犬公に内密でげすよ、先山王の祭には花車の上で威張を利すし、庚申塚では人間樣に拜れると、第一三本增せば人間に成る己樣だものゥ、犬公なぞと一緒にされて堪る者か。ピン〳〵〳〵。ヒヤッ何だ尻の下から、ピン〳〵〳〵。オヤッ又來たぞピン〳〵〳〵。オヤッ。ピン〳〵。ヒヤ此奴ァ不思儀だ。ピン〳〵〳〵。と電信

が掛たから堪りませんキヤツ／＼と騷いで居る中、『カチオクレ』『スグカヘレ』『ニバンデタツ』なぞと猶々烈しく猿公のお尻へピン／＼／＼と掛りますから、ヤツ大變だオウ痛い。ピン／＼／＼。此奴ア大變。ピンピン。折柄上野發の列車が直下をガラ／＼／＼。猿公はキヤツと驚いて汽車の上へゾドン、其儘列車はゴロゴロピイー。

水害と青物

頃日來府下若くは近在各所の水害の爲め諸物價の騰貴せざるはなく中にも青物の如きは例年今頃は少しく下落すべきを本年は總じて持合ひ又は二三割高にて殊に葱、蓮、葡萄等は非常の騰貴にして十日前には千住葱一貫目十二三錢、蓮一把(五六十)廿五錢、葡萄一籠五十錢位の處昨今に至りては葱並物一貫目四十錢、蓮一把五十錢葡萄一籠二圓位茄子は五割高にして大籠六十錢品川籠二十五錢、大根一把(五本)上物十錢並物六錢里芋一樽一圓十錢薩摩芋上一貫目八錢並六錢其他人參、栗、栗柿は益々騰貴の摸樣なり而して本年栗は出來大に惡しく出荷少なき爲め上物一升廿五錢並物十五六錢位なりと

家政

手紙の事

手紙の文章は今の世になつて却て衰へたとでも申しましやうか。昔の人は手紙と申しますと大層氣をつけたもので、ちやんと下書をし、手取にひかへとして一通取て置てそうして先方へ送つたものです。

それ故昔の人の手紙には大層名文章があつて、立派に手紙文學をなして居ります。

申すまでもなく手紙は口上の代りで用さへたりますなら何でもよいやうなものゝ、手紙にも種類によりて違ひますが、祝儀、不祝儀、慰めやら、誘引やら、事務の手紙より外は、用が足り意が通じたばかりでは十分とはいはれません。殊に女子の手紙はあやもありつやもありとりつくろふて、水莖の跡さへにほやかに、平

生のつゝましいところの見へるのが奥床しいものです。

此の忙しい世に手紙を書くため大層時間を取るのは決して褒むべき事ではありません又餘り蕪雜な文章で無作法を書き散らしたなどは決して請取る人を喜ばせる仕方ではありません

雜事片々

(1)とりもちの衣服につきました時は、大根のしぼり汁で洗へば屹度落ちます。又油のつきました時も、大根のおろしを其につけ、熱湯で洗へば落ちます。

(2)疊に墨のつきましたには、水などをかけて拭きますと却てたゝみの目へ浸み込みまして悪るふ御座います。ですから墨がこぼれたなら其儘にして、よく乾かし、後に新しい草履でこすればよくとれます。

(3)疊にインキのつきましたのを落すには、職工用鹽酸(藥種屋にあります)を水にて十倍位に淡くし、そしてインキのついた處へつけて拭き、後に水雜巾で拭へば如何な色のインキでも落ちます。けれども此は劇藥ですから注意して扱はなければなりません。

(4)又疊の垢を落すには、橙を二つにわつて、疊の上をよくこすつて後雜巾で拭へば奇麗になります。

生れし嬰兒のため

◎産兒の身躰には多少胎脂の附着し居るとゆゑリスリン或はテレフ油を塗り、柔にフランネルの小片に拭ひ去るべし。

◎産兒に湯をつかはせんとならば六十度位の微温湯をよしとす、浴せしむるには先づ臍帯の結紮部を掩し、然して後耳の項窩、腋窩、關節部、股間等を能く洗ふべし、少々は石鹼を用ゐて妨なし。

◎産出後二十四時間中は常に右側を下に伏せしむべ

し。

◎産出後二十四時間内に大小便なき時は、フランチルを少し熱き湯にて絞り腎臓の部を温むべし。

◎産兒の身躰にたゞれを生ずることあらば、天花粉を撒布するか、油薬を軟き布に展ばして貼くべし。

◎俗に「まくり」と稱する毒下しは用ゆるに及ばず直ちに母の乳につけてよし。

◎授乳せし後は硼酸水にて産兒の口内を洗ひ乳草の起るを豫防すべし。

◎産兒の眼は日光又は火光に當てしむべからず、若し眼にめやに等の生ずる事ある時は日に數回硼酸水を以て洗ふべし、眼中に何か發生物を生ぜしを發見せば、直ちに醫師の診察を乞ふべし。

◎母親は左右の乳を交々含ましむる心得ありたし、左なくては一方の乳のみとなるなり。

◎乳房腫れて疼痛を覺え且つ乳汁分泌せざる時は十五分より三十分間までフランチルの布片に熱湯に注ぎたるものを、能く絞りて其局部に當てゝ蒸すべし。

◎産兒は毎日入浴せしむべし、臍帯は入浴毎に包みかゆべし、左なくては腐敗し之より種々の病を生ずることあり。

◎母親に乳の出でざらば、乳母を雇ふべし、年齢は二十歳より三十二三迄、健全なる體格を有し、肺病又は遺傳病なく、十分に望まば産兒と乳母の兒と同年齢位を欲すれど二個月までは妨なし。

◎乳母を雇ふ便宜なき家にては牛乳にて育つべし、一週間内は湯を三倍加えそれより段々牛乳を濃くすべし。

◎産兒は未だ胃袋小なるゆゑ一度に多く飲むこと能はず、されば日中は二時間毎夜中は三時間毎に乳を授くべし。

以上は産兒世に出でゝ一週間内の家族の心得を述べた

るまでなり。

夫に對する妻

田村蝶子

元よりも我が身一家の私言にして、世に教へんなどいふべきならず、年頃日頃折々にかき集めたる藻汐草、汐やく海士が百さへずり、よしなし事とあながちに捨てたまふとも更に詮なし。一國の政ごとは明君のよしやこれを統べたまふも、誠心誠意補佐しまいらす、良宰相のあらざれば、永久の安寧いかでか／＼保ち得べき、一家に於けるも亦然り、主人のたとひ之を治るも傍より是を輔けて、眷族婢僕が心を操なし、いよ／＼服し従はしむべき妻の内助のなくてあらんや。されば一家の妻たるものは一國の宰相と等し、其任誰か輕しといふや、蒲柳の身にして此重き責任ある家妻の夫に對する心得數へ來れば日も猶足らず、僅かにそれか一般のみを拙き筆にかき綴る。

古の教へに『婦人は別に主君なし、夫を君と思ふべし』とあるこそげにさることなり、女は男の如く出で丶君に仕ふるといふ事もなく唯々内にありて家政を執るものなれば、此心掛にて澤山なり、此心掛さへ果たしなば國へも君へも間接に仕へたりといふて不可なし。偖一家の主人は、更に華士族平民の別なく、妻子眷族を養ふため、分に應じ品により、終日出で丶身を忘れ暑さにも寒さにも、病める外は休む時なく、おのかじ丶其職に服するものなれば、其業を終へて歸り來たまふ時、妻たるもの丶充分なる愛と情とを以てむかへ勞はり慰めまいらせずば、何によりてか其終日の勞を醫すべき、古來獨身の人に狂者多きは此樂と慰とを全く欠ける故と知るべし。

狎るにつれておのづから禮を失ふ事尤も戒しめざるべからず、些細なる一事二事積り／＼ては遂に習慣とな

りて遂には婢僕までもこれを見ならひ、言ふべからざる一家の惡風、主人の威落ち、主婦の光はげ、命令もいよ／＼行はれ難きに至る、かくなり行ば他人は見て主人を笑ひ主婦を罵り、思はざることのためにうき禍を醸すなど初は僅かなる事が元なり、忘るべからず謹むべし。

夫の被服手廻り品などの取扱方はよく／＼心を注ぎ、子供をはじめ誰かれにも、これをふみまたげなどさせざらん樣、かね／＼敎へ置くべきなり、しかなすは一家の秩序を正すの初め、主婦たるものゝ位置さへも重からしむ基なれば、甚だ肝要なることなり。

他人に贈物をなす時は、必すや先夫たる人に相談遂けて後になすべし、更に己か一了見を以て事はなすべからず、殊につゝしまざるべからざるは、夫に秘して他人に物を贈ることなり、これ夫を輕んずる罪のみならず、彼の人こそはやぶさかなり、慾心深きなとゝあらぬ事とも風潮さるゝに至るの元なり、決して／＼忘るべからず。

若かりし間こそ夫婦の中らひ親密なれ、年更け行くに從へて其情次第に薄らぐは多し世間にあることなり、是色々の事狀其原因をなすとはいへども畢竟は妻たるものゝ心たらざるが致すところ、ゆめ／＼さることあるべからず、遂には一家二つに別れ婢僕も別れ彼に與みし是に黨する等一家衰微のもとゝ知れ。

人の妻たるものゝ我が身に過ちあらん時、夫の怒りをいたく恐れ、是を秘し又は言を巧みにしていひ飾りそを免かれんとなすことなと決して／＼あるべからず、必ずありの儘をいひ出て謹んで許を請ふべし、されば夫たるもの口穢なくも責めさるべし、よしや上べこそ嚴しく咎むることのあるとも內心は暗に其正直を憐むなるべし、そを然かせざるは實に夫に對して尤も禮をかけるものなり、婢僕などのこれを見習ひ各主人に對

して其過を掩ひかくし僞を述べたつる樣なりゆく時は、一家は盜人のより合、欺僞師の住居となりていと淺間敷樣なるべし。

十月中の園藝

◎蜜柑、金柑、萬兩橘　黄色なる實は漸く熟して、此月を賞観の好季とす、

◎茶梅　上旬より初めて開花す、賞観最美

◎薔薇　秋咲のもの今月開花す、春季の花に劣ると雖も、猶は愛観して可なり

◎木犀　芳香最好、賞観最佳

◎落霜紅實　紅色の實雅致を有し其観季甚だ長し、

◎小菊、早種菊　此月中旬より開花す、愛観最可なり

◎蝦夷菊、濱菊　賞観此月を以て終とす

◎紫苑　愛観此月限りとす、

社交一斑

流行の栞

流行の髮風　流行子

丸髷は日本にて第一に指を屈する髷にて、これは世界に出してもヒケは取らぬ積りなり、島田の如く婀娜ならず、束髮の如く沒趣味ならず、言はゞ高尚にして優美に窮めること他に類なし、されば一時束髮束髮と言ひ囃せし西洋的の細君にても此頃は髷形の大小を撰ぶといふことゝなりしかば、丸髷は上中下の細君社會に大流行なり、さて其流行風は、山の手にては髷の薄くして耳の角になりたるもの多く行はるれどこれは屋敷風とでも言ふべきか、一般の流行にあらず、又馬鹿に髷の厚くして其の眞中がはよいと高く隨分奇な風もあれどこれは餘程物數奇の社會のものにして一般の流行とは申しがたし、素より丸髷に限らず島田にても銀杏返にても啻に山の手と下町の相違に止まらず、同じ下町にても新橋と日本橋とは大層の差なり、次に最も流行髮風を掲げて見ん。

丸髷は今春よりも稍大なるかたにて耳も眞中の厚味も同樣なるを好み、根は高きかたにて結上げた處でむつくりと品能く厭味のない風を可と

す、髷形は歌舞伎形最も多く行はるゝが如し、すじめ形はちと廢れなり。

島田も根は高きかたにて下町にてもすつきと品格のよい處流行す、これは新橋の藝妓社會の嗜好に感染せし者か新橋は浮葉の風俗に似ず、其客重に紳士と稱せらるゝものなるが故に其藝妓等も諸事上品につくるためか、島田の風頗る上品なり、髷こんもりと高まり前より見れば富士の形を爲し、いゝしたも十分たつぷりにて先づ申分なき處なり。

銀杏返は十分大いなるかた流行す昨冬よりも餘程大きくなれば、根も隨つて高からざるを得ず。

鬢、たぼ共につまるは、髷の形大なる影響もあるべし。

前髪は細く起りて次第に廣く末になつて一文字におさまるこそ一般の流行なり、丸髷にても、島田にても、銀杏返にても前髪のとりかたは同じ。

雜録

小供の世界

天水生

羊に草はむ術

二三ヶ月前の事なりし、亞米利加の北の方より南の方へ、一頭の羊と、生れて一月ほど經たる小羊を送るとて、船に乘せて携へ行きぬ、航海中は與ふべき青草なければ、大麥を與へ置きしに、おい〳〵と食ひ慣れて後にはいと好ましげに食するに至れり、然るに船は港に着きければ、陸にのぼせ、青々と茂れる牧場に携へ行きて草をはませんとすれど、羊は青草を好まずなりにしか、はた草はむすべを忘れしか、更にはまんともせず、人々は驚きながら、とやせん、かくやせんと考へしのち、遂に大麥をば地上にまき始めぬ、初めの程は多量の大麥をまき與へ、追々と少なくまき與へ、大麥をはまんには草をも共にはまねばならぬようにして、漸く日數のたつにつきいつの間にやら羊は草はむことを學びぬ、後には再びいとも好ましげに青草をのみ食するに至れりと云ふ。

鳥の如く囀づる人間

所は英領コロムビヤに程近きアラスカの邊に、少數なる土人の群を發見せしが、其言語は禽鳥の囀へづるに

さも似たりと、其職とするは、獵狩にして、彼等は幾度となくおのが住家より逐ひ立てられ、遂にかの地方にまで逃げ行き、今は其家とても只數條の小枝をたわめて一時の雨露を凌ぐのみ、全種族の數は幾許かと云ふに只僅かに十二人あり、かの地方にかゝる種族のあるよしは、これまで人々の噂せしところなれど、この頃に至るまで誰一人として、鳥の如くに囀る人を見し者なかりしが、漸く昨年の冬に發見せられしとなり、かの種族を名けて「ツッソウー」とは云ふなり。

小鳥の住家

亞米利加太平洋の海岸に近き高山の嶺に、丈高く中空に聳ふる一本杉あり、其周圍の樹木は一株も殘らず伐りはらはれたれば、この一本杉は益高く見へて攀ぢ上るべくもあらず、然るにこの一本杉の枝高く、一個の鳥籠のつるしあるぞ不思議なれ、籠は多くの歳月を經て幾度となく雨風にあらされしさま見ゆ、この一本杉は其幹やさしければ、誰人も攀ぢ得るとなし、想ふに數年の昔、この山なほ茂りさかへし頃に遠からず伐りはらはるゝとの知れたれば、小鳥を愛せし人この籠を作り周圍の大樹によぢて、この一本杉の枝高きところに纒き置きしものならん、爾來幾歳となく春來る毎に多くの小鳥は此住家に在りて其雛を養育し、朝な夕な昔の恩人を追懐して愛慕感謝の歌を囀つるを聞く、可憐なる小鳥は此籠の損せん限り冬は溫き住家を得、春は安けき住居に雛鳥蕃殖の樂を有するなるべし、誰人の爲せしかは知るに由なきも、籠をつるせし人の心こそいとゆかしけれ。

旅行猫

世か開くるにつれて猫や鼠までも開化するとは、時として笑談に聞くところなるが、實にさるものと見へ、世に旅行する猫ありと云ふ、其話は亞米利加の南方某所に通ふ汽車中に一頭の猫ありて、常に列車内を我家

と定め、停車場に到れば下車して食を求め、發車の鈴響けば忽ち列車内に歸り、乘客の無聊を慰むるもの甚だ多しと云ふ、只滊車旅行をなす猫あるに止まらず、ニユー、ヨルクよりロード、アイランドの間を航する小蒸氣船には、十年間ほども棲息し航海に慣れたる猫ありて、徒然なる乘客の好友たり、その會々陸上の休息を欲するや、陸上に在ること數日、而して同船が一廻航を終へて歸り來るを待ちて再び其船に乘り、曾て他の船には乘ることとなしと云ふ、面白き話ならずや。

將來の良民

先つ頃米國ブルークリンの都にて、小學生徒のために とて開かれたる博覽會ありたり、敎育上に裨益を與ふるさま〴〵の物を陳列し、或は敎場裝飾の雛形を示し、或は米國の童兒等が忘れてはならぬ大人豪傑其他文學者政治家等の寫眞、畵像、をも排列して、博く人々に販賣せり、或日の事なりし年の頃十三四才の童兒三人同級生と見へ打連れて場内に來り、詩人ロングフエルローの畵像の下に到り、ともに見とれありしが、人少き片邊に集り切りに何事か相談し、其日はそれにて過行きぬ、而して其畵像の價は二ドル半なりき、翌日にまたもやかの三人の童兒は入來り、二ドル半の金を出して其畵像を求め、いと喜ばしげに打連れて歸り行きぬ、さて其畵像を如何にせしかと云ふに、おのが家には携へ行かで之を學校に寄附し己が敎場につるしたり、さてかの金は何處より獲來りしものかと云ふに、平素三人が各自に貯へ置きたる小使錢を出し合せて持ち來りし也、斯る童子こそ眞に將來の善良なる市民となるべけれ。

有王（口繪の繪解）

治承二年大赦行はれて鬼界が島に流れし成經康賴は歸京を許れじかど俊寛のみ殘されたるぞあはれなれ、こ

ゝに俊寛の稚くより召使たる童あり名をば有王といふ鬼界が島の流人都に歸りたるに獨り我主のあらざるを悲み遂に鬼界が島に渡航するに決し發するに臨み俊寛の女の訪ふてその消息を請ひ髮裡に收めて人に見せじと隱し置けり幾多の辛酸を經て漸く島に着きしが聞しにまさる荒涼の地に胸ふさがりつゝさて俊寛僧都は何處に御在ときけども皆知らずといふに力を落せしが漸く思ひかへしてそこゝと尋ねありき途にてはしなく相見たる心の中やいかにありけむ雙々相抱てしばし言葉も出ざりきこれより有王俊寛の側に侍して共に瘴烟蠻雨の中にありけるが俊寛は世をはかなむのあまり絶食して死せしかば有王天に仰ぎ地に伏して慟哭しおのれも自盡せんとまで思ひしも僧都の女へ我ならでその頃のさまいひ送るものなしと思ひかへしやがて涙と共に俊寛の白骨を齎らし海をこへて都に歸り僧都の女につぶさに物語りたる後高野に登りて法師になり主の後世をぞ弔ひける。

社告

本社主筆德富猪一郎去八月十一日を以て無事英國へ到着致候に就ては彼地の社會、風俗及家庭の有樣等精細の觀察を遂げ一々通信を以て今後の紙上に掲載致すべく候此段豫告候也

歌苑の課題は秋季雜題、何にてもよし續々詠草投寄あるべし

附白前號募集の分は餘白なきため次回に讓る

九月　家庭雜誌社

家庭雜誌

○毎月二回十日廿五日發兌

定價		地方郵稅共
一冊	金五錢	金五錢五厘
半年(十二冊)前金	五十錢	金五十六錢
一年(廿四冊)同	金一圓	金一圓十二錢

○廣告料一行(廿四字詰一回ニ付)金八錢

○本誌御注文ハ前金爲替向所ハ芝口郵便支局

本社電話番號七十番

發行兼印刷人　吉崎圓吉

編輯人　金子佐平

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　家庭雜誌社

明治廿五年九月十四日遞信省認可

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地株式會社秀英舍印行